物理攻撃なら全て跳ね返せる件について　～仲間を守るためなら手段を選ばない～

虎上 神依

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

学校帰りに突如、何の前触れもなく異世界転移した自称凡人の高校生、天宮竜也。そしてある時、彼はあらゆる物理攻撃を跳ね返すという作用反作用の法則破りの力、『物理反射』の能力を得ていることに気づいた。そして、世界は刻々と暗黒汚染鉱石である『黒素』に汚染されていく中で彼は白狼族の美少女とともに「６つの紋章」探しの旅に出ることを決意する。これは時空と運命に抗いながらも仲間や多くの人々、世界を守りきるため戦いに全てを捧げた一人の少年の冒険譚である。

※注意　基本毎日更新です、文章が多少雑だったりしますが多めに見て下さい、お願いします……。感想やコメント受け付けています！（お手柔らかにお願いします……。）

尚この小説は他のサイトで重複投稿が行われる予定です。

ＵＲＬができ次第、ここに載せていきたいと思います。（５つ位重複するかも…）

小説家になろう：ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ９８２８ｄｗ／

カクヨム：ｈｔｔｐｓ：／／ｋａｋｕｙｏｍｕ．ｊｐ／ｗｏｒｋｓ／１１７７３５４０５４８８２８５８３１１

目次

プロローグ　絶望に呼び覚まされし力 ―― 1
第1章　導かれし転移者
第1章　1話　いつの間にか…… ―― 3
第1章　2話　イケメンの力は計測不可 ―― 8
第1章　3話　チンピラ対処法 ―― 13
第1章　4話　最悪にして最高の展開 ―― 19
第1章　5話　美少女と罪悪感 ―― 24
第1章　6話　人助けリベンジ ―― 29
第1章　7話　完全なるデジャヴ ―― 35
第1章　8話　奇跡の再開 ―― 40
第1章　9話　転移者リュウヤ ―― 46
第1章　10話　怒涛の追跡 ―― 52
第1章　11話　忍び寄る黒き影 ―― 57
第1章　12話　攻防戦の幕開け ―― 64

プロローグ　絶望に呼び覚まされし力

――マズいな。

脇腹に生暖かい何かが流れていく感触が伝わり、彼は血を流しているのだと気づいた。

大した量ではないかもしれない。だが、止血をしない限りは生命に関わる大きな問題となる。

立っているだけでもやっとだった。

――痛い。物凄く痛い。

それもそうだ、脇腹をかすったのだから。

ふとそこを見ると彼の制服がゆっくりと赤色に染まっていくのが分かる。

だが、そんな事を気にしている暇は与えられていない。

奥の暗闇から3発ほど濃い紫色の球が飛んで来るのが目に入った。

彼の持っている頼りない両手剣でその球を全て弾き返す。

――痛い、痛いけどここで負ける訳にはいかない。

今ここで逃げ出した所で助かるという保証はない、それに彼女を置いて逃げることは出来ない。

「リュウヤッ！」

「俺は平気だ！　だからマナの回復とやらに集中しろ！」

何かに怯えたような声に対して彼はそう叫んだ。

そして次第に感覚が無くなりつつある手足を何とか動かし、次々に飛んでくる紫球を斬っていく。

自分はただの凡人である事を自覚している。

だから、こいつらに勝てるという保証は全くもって無い。

無いかもしれないけど――

血の感触を脇腹と腕に味わいながらもひたすら体力の限界が来るまで彼は二本の両手剣を振るい続ける。

丸で闇その物が俺達の事を襲ってきているかのようにも感じられた。

相手の顔を拝もうとしてもそれは叶わぬ願い、だから感覚だけを頼

りに攻撃を防ぐ。
「おりゃあああああああ!!!」
所詮彼はただの高校生。
頼りないただの高校生。
能無しのただの高校生。
弱っちいただの高校生。
だけど、そんな高校生にだって意地はある。
だから彼は戦うことを諦めたりなどしない。
出来ることであれば何だってやる、それが彼の今の心情である。
――彼女だけは俺の命が無駄になろうとも何としても助ける！
剣先が綺麗な軌跡を描きながらも物凄い速さで振られている。
次の瞬間、暗闇から紫球だけではなくブレイドが紫色に光り輝いた小さな剣までもが飛んできた。
これ以上攻撃を食らうことは身体的にも防衛的にも精神的にも終わりを意味する。
――どうか跳ね返してくれ！
彼が腕をクロスさせて防御態勢に入ると奥から飛んできた小さな剣は大きな金属音を鳴らしながらも全てを弾き返した。
そしてその剣は逆回転し始めたかと思うとブレイドを紫色に輝かせたまま再び暗闇の奥へと飛んでいった。
――この正体不明の能力があれば……、イケる！
「――リュウヤ、大丈夫……？」
「安心しろ、俺が必ず――守る!!」
一生に一度は言ってみたいと思っていた言葉を叫ぶと、彼は再び暗闇の攻撃に抗い始めた。
彼の出せる限りの力を腕に込めて。

第1章　導かれし転移者

第1章　1話　いつの間にか……

――ここはどこだ？

途方に暮れて歩く彼は周りを見渡しながら心のなかでそんな一言を呟いた。

彼の周りの人は色々な色の頭髪、金髪や青髪、緑髪、赤髪と様々である。

格好も鎧やらローブやらで彼と同じ服装の人は誰一人としていない。

「少なくとも貨幣価値が違う時点で日本じゃないよな……。」

彼は財布を制服のブレザーのポケットに仕舞いながらそう呟いた。大した金額は入っていないが元の世界・・・・ならば一日は食べ物に困らず凌ぐことが出来る。

だが、この世界じゃ一文無しと表現するしか無い。なにせ貨幣価値が違うのだから。

短めの焦茶髪に頭髪と同じ色の瞳。これと言って高くもなければ低くもない成人男性平均的な身長。体はやや筋肉質であるが着ている制服のせいで良く分からない。

凡庸と言えば凡庸な見た目だが、この世界の群衆に紛れていても彼は間違いなく目立っていた。

それも当然だ、一人だけ街中で珍奇な格好をしているのだから。それに頭髪も色が近い人はいるものの全く同じ人は誰一人としていない。黒髪でなかったのが幸いだ。

遠慮なしに刺さる痛い視線に耐えながらも彼は一人街のど真ん中で考えていた。

――落ち着け、一旦冷静になろう。この街並みといい、人といいここが元の世界ではないことは確実だ。ならば考えられることは一つ。

「ここは異世界だ！」

彼は得意げに腕を組みながらそう結論づけた。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

彼の名は天宮あまみや竜也りゅうや、日本生まれの高校2年生である。

頭はそこまで良くないがスポーツは人一倍出来る方である。幼い時から剣道や柔道を習っていた影響もあり、基本得意なスポーツは格闘技に特化している。

才能がそこそこあったお陰か、剣道においては全国まで勝ち進んだことがある。中学の頃は『二刀竜』という二つ名を付けられ他校から恐れられていた。因みにこの二つ名は二刀流と名前の竜也を合わせ、生まれた。

だが、受験を控えた今は剣道部を引退して勉強に明け暮れている。といってもゲームの時間は全くと言ってもいいほど減っていないが。

彼はゲームに関しても人一倍長けていた。今話題になっているVR格闘ゲームの公式全国大会で準優勝するほどの強者だ。

3歳頃から様々なゲームにハマること14年、彼はゲームをひたすらとやり続け剣道で鍛えた反射神経を利用しここまで成り上がった。今じゃ、オンラインゲーム界でも名の知られるゲーマーとなっている。

だがそんな常人離れしている能力を持っているのにも関わらず彼は自分の事を平凡とした。

平凡を極めることこそ素晴らしい事であるという宗教的思考を持つようになってから彼はとことん平凡を貫いてきた。

そしてそんな平凡（？）は今——

「異世界に召喚されて街を彷徨っているとさ……。全く、一体どうなってんだ？」

ため息を付きながらリュウヤは路地裏に座り込んだ。

地面は綺麗に舗装されていたが、現代日本ほどではない。第一、中世風で日本の要素がかけらも存在しなかった。

「だけど、言葉は通じるし文字も知らなかったけど何故か読める……。

文明はよくある中世レベル。機械などは存在しなくて建物は基本、石や木材で作られている。」
見た光景を一つ一つ頭の中で整理していく。
一応ラノベはいくつか読んだことがあるので何とか対処はできそうであった。
だが、問題はラノベあるあるが発生するのか、しないのかだ。
よくあるパターンでは何かチートスキル授けられて無双するとか、ステータス的何かが存在するとか……。
チートスキルにおいては授けてくれる人いないので可能性は皆無に等しい。でも、元々から備わっているなら話は別だが。
そもそも電車で寝ていて気づいたらこの世界に召喚されていたのだから誰かに召喚された訳でもないだろう。
寧ろ何の前触れなしにこっちの世界に転移したと表現した方が良い。
「俺だって伊達にラノベ読んでいたわけじゃないからな！　コミュニケーションは取れるが金は通用しない。まだマシな方だな。」
リュウヤは先程、青果屋と思われる露店の店主から分けてもらった果物をかじりながらそう考察した。
転移に気づいてまず訪れたのが商店街、そこで青果屋との交渉の末何とか手にした果物だった。
青果屋が優しい人で助かったよ。「他所の国から来たのなら折角だからこれをやるよ。」だってさ、優しすぎて涙出そうだった。
見た限りではこの世界（国）の通貨は異世界あるあるだ、安い順から銅貨、銀貨、ミスリル貨、金貨らしい。
結構、文明が発達しているようで何よりだ。
「そしてこの世界は割合的に獣人が多いと……。ざっと見た感じ８割が頭に耳やら、尻尾やら生やしてるもんな。確かに憧れではあるが……。」
憧れではあるがここまでいると流石に飽きてくる。
犬耳及び狼耳、猫耳、狐耳、うさぎ耳、トカゲ（？）耳、いやリザードマンだなあれは――

それにエルフらしき人もチラッと混ざっていた気がする。
こう考えると人間って特殊!? それはそれで何か慣れない。
リュウヤは再び長いため息を吐く。息が白くならない所、気温もそこまで寒くはないだろう。
もしくは南極のように空気がやたらと綺麗……、流石にそれはないか。
そしてさらなる問題。それはこの世界の力、ＦＯＲＣＥだ。
所謂『物理攻撃』、『魔法攻撃』、どちらにも入らない攻撃方法だ。もし何の力も付与されていないのなら魔法攻撃は無理だろう。
展開的に何かの力に目覚めてと言う可能性もあるが確率は低いので取り敢えずおいておく。そう考えると本物の剣の扱いには慣れておいた方が良さそうだ。一応剣道習っていたから多少は使えるだろうが、竹刀と本物は違う。
本物の切れ味ときたらナイフの域を超えている。それに銃刀法違反のせいで刀は指定された場所でしか握れなかった。
居合斬りの教室を見学したことがあるからまだしも、本当に初めてとなると恐らく体が震えて使いこなすことも出来ないだろう。
「魔法……、使えるのか？」
自分の手のひらをマジマジと見るが何も変わる気配はない。そもそも一瞬で使えるようになるわけが無いと思うし、今は諦めよう。
それに電車に寝ていて転移までは良いが、転移された目的がさっぱり分からない。
これはいっその事転移しちゃった、アハハハという風に考えておいたほうが良いかもしれない。
「転移しちゃった、アハハハ……。気持ち悪ッ。」
自己嫌悪で潰れそうになりながらも所持品を確認する。
着ているもの、学校指定のブレザー＆ワイシャツ＆ズボン、靴下、スニーカー（新品）、マフラーと手袋（今は外している）、下着、これぐらいかな。
持ち物、スマホ、スマホの充電器（電気無いだろうから意味ない）、財布、リュックサック、教科書は皆無、その代わりにジャージ、ノー

トＰＣ（高スペック）、ＰＣの充電器（電気無い）、生徒手帳（絶対要らない）、筆箱、その他お菓子が少し、多分これぐらい。
「教科書が武器になると思ったのだが……、そう言えば今日体育祭だっな。」
体育祭のことは置いておくとして一文無しでコレだけと言うのはかなりの危機的状況。
――まてよ、誰かにこのノートＰＣを鑑定してもらえば金になるかも……。いやいや売るならノートＰＣよりもスマホの方がマシだな。
「まだ絶望ってわけじゃ無さそうだな。それにしても何で俺が召喚されたんだ？　こんな平凡な俺がだ。」
希望を捨てずにいたが、頭の中は家に帰りたいのワードで埋まっていった。
異世界転移は中々面白いと思ったが実際なってみれば絶望その物だ。幸い、学校帰りだから良かったもののコンビニに立ち寄った時だったら更に絶望的状況に陥っただろう。
「そもそも、何も出来ない俺にこの世界を生きていけるのか？」
頭を抱え込んで自分の行く末を考えるリュウヤ。
ふと、その表情が変わった。
「大丈夫かい？」
頭を上げて見れば目の前に青髪の男が立っていた。

第1章　2話　イケメンの力は計測不可

目の前に一人の男が立っていた。
落ち着いているのにも関わらず何故か威厳のある青色の頭髪。
その下には迷いが見られない深緑色の双眸、それは彼の生き方その物を表しているようであった。
そして幼さを感じさせることのない整った顔立ちも彼の雄々しさをより感じさせている。
一目見るだけでも彼が並の人間では無いことが分かる。細い体つきであるのにもかかわらず尋常でない威圧感を放っていた。
何処かの兵の制服らしき白い服と白色のローブでその体を包み、腰に眩い輝きを放ちつつもシンプルな装飾が施されている剣が下げられていた。
一言でまとめればバリバリ強そうな雰囲気を漂わせているイケメンだ。
「あ、あぁ……。」
リユウヤはその青年の容姿に見とれ、言うべき言葉さえも失ってしまった。
正直、異世界に来ていきなりこんなイケメンと出会わせられてもただただ困るだけだ。
「ほ、本当に大丈夫かい？　目が死んでいるみたいだけど……。」
「シレッと酷いこと言うなよ！　い、いや、ちょっと今俺が置かれている状況に絶望していただけだ。あ、後、俺別に怪しい者でもないからな！　その服見た限り、警備隊かなにかだろ？」
「君の言う通り僕はこの王国の衛兵さ。まあ、今日は非番だから軽く街を見回っていただけだけどね。」
「非番中に街をパトロールって相当仕事熱心だな……、と言うか爽やかすぎだよ！」
顔、振る舞い、声、殆どにおいてイケメンが持つべきスペックを満たしている。だが、最初の言葉でちょっと減点判定といった所だろう。

目が死んでいるって言われると流石のリュウヤも少し傷つく。しかし、そのような目であったことは事実なので反論はできない。
「僕はオズワルド、君は？」
「俺は天宮竜也だ、リュウヤで構わない。所で変なことを聞くようだが今日って何月何日だ？」
「今日……、１４月１５日だね。」
――いや、いつだよ!?
リュウヤは内心でオズワルドに対して物凄い突っ込みを入れた。しかし、世界が違うのだから暦が違うのも当たり前である。
それよりも何月何日で通じたのだからそこを喜ぶべきだろう。
「それにしても絶望か……。後、リュウヤはその髪型、服装からしてこの国の人ではないみたいだけど……。どこから来たんだい？」
「サラッと呼び捨て!?　何処からか……、その手の質問は正直答えづらいな。やましい事はないんだけどさ……。」
一応、相手は衛兵なのだからここで怪しい行動をすれば直ぐに捕まってジ・エンドだろう。
それにこの国と言っている時点で恐らく入国手続きなど色々あるはずだから、それをせずに王国のど真ん中に飛ばされてたリュウヤにとっては尚更厄介だ。
が、オズワルドの反応は意外なものだった。
「まぁ、何かしら事情があるのだから深くは聞かないことにするよ。」
「えっ、良いんだ……。」
「それにリュウヤからは何の悪意も感じられないし、誤魔化してるってわけでも無さそうだしね。取り敢えずそこの所は伏せておこう。」
「優男だな！　ホント、頭から爪先まで対応がイケメンなのな！　逆に怖いわ！」
ここまで優しくされるとフラグ立ちそうなのでここらで一旦へし折っておくべきだろう。
それにしても見れば見るほど惚れそうな美男子だ、もはやこの異世界で一番と言っても過言はない位。
これは本人も困るぐらいにモテるだろうな……。

「とにかく、何か困っているんだろう？　僕で良ければ手伝うけど……。」
「手伝うって、オズワルドさんは今日非番なんだろ？　状況に絶望しているとはいえ流石にそんな申し訳ない事は出来ないぜ。」
「オズワルドでいいよ。でも、見た感じ相当困っているみたいだったからね……。」
「そりゃ絶望しているからな。だがこれは俺の問題だ、オズワルドまで巻き込む訳にはいかないさ。……その代わりと言っては何だけど一つ聞いていいか？」
　リュウヤは自分の横に置いてあるリュックサックを拾い上げて背負うとオズワルドに向き直る。
　オズワルドは爽やかな笑顔で頷いた。
「この街の事であれば基本何でも聞いて、でも世間に少し疎いかな。」
「大丈夫だ、大したことじゃない。この近くに物を買い取ってくれる鑑定屋みたいな物はあるか？」
「鑑定屋……。ああ、この商い通りの先を真っすぐ行って３番目の角を右に曲がって５件目の建物だよ。」
「そうか、助かった！　それじゃ俺はその鑑定屋に行く事にするよ。」
　そこでスマホまたはノートＰＣを売ることが出来れば多分、数日間は暮らせる資金を得られることだけは間違いないだろう。
　問題があるとすればこの機械の価値をどう鑑定屋の人に説明するかだ……、コレばかりは自分のコミュ力と説明力に掛けるしか無いだろう。
「どうせならそこまで案内しようか？」
「いやいや、流石にこれ以上の迷惑を掛ける訳にはいかないさ。俺の道は俺が切り開くべきだしな。」
　オズワルドは顎に手を当てながら静かに考え込んでいた。余程困っている人を放っておけない性格なのだろうか、そんなイケメン的正確には心底驚かせられるばかりだ。
　見た感じ、オズワルドはかなり良い家柄で育っていそうだが流石にイケメンの家の厄介者になる訳にもいかない。

「そんなに生活に困っているなら……。」
「断る！　性格上から何を言うか直ぐに分かったぞ！」
「そうか、なら温かく見守らせて貰うよ。所で変な事を聞くようだけど何を売るんだい？」
「ああ、疑っている訳ではないけど絶対に取るなよ？　これは俺の人生に関わるんだからな。」
　イケメンに頼まれるとなると何故かやらなければならない強制イベントの様な気がしてならない。
　リュウヤは彼のブレザーの胸ポケットにしまってあるスマホを取り出しオズワルドの前に突き出した。
　オズワルドは初めて見るその機械に首を傾げる。
「見たこともない物だね。武器か何かなのかい？」
「まあ見てろって。」
　リュウヤはスマホを片手で軽く操作するとカメラモードを起動し、オズワルドを画面におさめ写真を撮る。
　流石、イケメンだけあって良い絵になっている。因みに肝心のイケメンはただただ唖然とした表情でリュウヤを見つめていた。
「今、音がなったけど何かしたのかい？」
「いい感じに時間を止める事が出来たぜ。」
　軽く冗談を混ぜながらも先程撮った写真をオズワルドに見せつける。
　不思議そうな眼差しでスマホの画面をマジマジとまたオズワルドは「おお！」と感嘆の声を上げた。
　当たり前だ、機械が存在しないのだから写真を撮る技術もこの世界には存在しないはずなのだから。
　予想通りこのスマホはかなりの価値が付くに違いないだろう。
「僕の顔が鮮明に写っている……、一体どんな仕組みなんだ？」
「いや、ちょっとばかしここらの時空をこの画面におさめたまでよ。俺らのせか……、国ではかなり珍しいものなんだぜ。」
　つい「俺らの世界では流行っている」と口を滑らしそうになり、慌てて言い直す。

そして元の世界ではよくやった自撮りをすると再びその画面をオズワルドに見せる。
勿論、その画面にはリュウヤの顔が鮮明に表示されていた。
「僕は鑑定とかには疎いけど、コレは確かにかなりの価値が付きそうだね。」
「だろ？　今の俺は一文無しだしどうせなら売ろうかなとね……。」
「そろそろ行くのかい？」
「ああ、色々と世話になった。本当にありがとうな。またいつか何処かで会えると良いな。」
リュウヤは本気でそう思った。
何故かは分からないが、オズワルドとはまた会わなければならないような時が来ると感じだのだ。
味方としてか敵としてかは分からないが……、その剣を振るう姿を見る時がいつかくる。
彼の勘がそう言っていた。
「衛兵の詰所で僕の名前を出してもらえば会えるさ、非番の日はこうして街を見回っているけどね。」
「お仕事お疲れ様です。それでは……」
大きく手を振りながら走り始めるとオズワルドは爽やかな笑顔で見送ってくれていた。
イケメンに元気づけられるのは癪に障る事だが、今回は本気で助かったとリュウヤは心から感謝するのであった。
「不思議な人だね……。」
リュウヤが見えなくなった所でオズワルドはそう静かに呟いた。

第1章　3話　チンピラ対処法

彼、リュウヤは走っていた。
周りの亜人達に好奇の目で見られながらもただただ走っていた。特に理由はない。あるとすれば、時間が無駄だからとか変な目で見られるのが嫌だからとかだろう。
だが、彼にそんな事を考えている余裕なんて殆どなかった。頭の中はどうやって生きていこうのワードで埋め尽くされつつある。
その為この世界の通貨を手に入れるためにも先程オズワルドに教えてもらった道を用心深く確認しながらもリュウヤは進んでいった。
あの叫び声を聞くまでは……。
「だ、誰か！　助けてくれぇ！」
かすかではあるがリュウヤの耳にはハッキリと届いていた。
周りを見渡すがその悲鳴に反応した人はいないようだった。この瞬間、彼の頭の中からは先程まで考えていたワードは全て排除された。
当たり前だ、自分よりも他人優先で生きてきたリュウヤだからこそ成せる技。
助けを求める他人を無視して行くことなど到底無理な話だ。助けるのが平凡で普通な考えだろうと彼は考察した。
「面倒だけど行くか。」
内心はそんな事思っていないのにも関わらずそう呟いて彼は路地裏の方へと入っていった。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

「助けて貰いたければ出すもん出せって言ってんだろうがよぉ！」
「か、勘弁してください！　私は何も……」
「ああ？　一々うるせぇんだよ、さっさと出せ！」
見るとそこでは４人がかりで１人の男をよってかかって攻撃しているのがわかった。

この世界にもチンピラっているんだな、だけど危険度は元の世界と比べたら数倍跳ね上がっているといった所か。
――さて、ならばチンピラ潰しと恐れられたこの俺の出番のようだ。
彼らが持ち物を要求してくることは目に見えているので取り敢えずここらに貴重品を隠させていただきまして、いっちょやりますか。
「俺が強いかどうか分からないけど、取り敢えず複数人でよってかかって一人を甚振るのは止めやがれぇ！」
そう言い切るとリュウヤは地面を思いっきり蹴って一番近くにいたチンピラにハイキック、そしてその勢いで横に蹲っている男を庇うかのように他のチンピラに正拳突きを食らわす。
拳はグーではなく卵やライターを握っている様な感じで殴るのが一番効果があることぐらいとっくに知っている。
「今だ、アンタはさっさと逃げやがれ！」
「あ、ありがとうございます！」
そう言うと男は一目散に駆けていった。助けを呼んでくれると言う可能性もあるけどコレは考慮しないでおくとしようか。
リュウヤは一旦チンピラどもから離れ、体勢を立て直す。
「何だお前、やる気か？」
「俺らの仲間に攻撃とはいい度胸しているじゃねぇか。」
「度胸も糞もあるか！　そんなもん、助けるのが普通だろうが。やるんだったら俺とやろうぜ！」
殺気丸出しの男達を一瞥するとリュウヤは構え、戦闘モードに入った。
見た感じ相手は物取り。全員２０代半ばで薄汚い身なり、見た感じ悪人そのものだ。
取り敢えず、元の世界で通じた作戦が今回も通じるか試すことにしよう。
ただし、気を抜くことは許されない。これは自分の身を対価にして確実に勝ちに行く作戦だから自分が殺されると判断した時点でこの作戦は断念することだ。

「異世界転移何だから少しぐらいは強い設定が欲しいところだね。現時点で俺ＴＵＥＥＥだったらまた話は別だけど、多少はスキル追加してくれたっていじゃねぇかよ！　取り敢えず、今ちょっとイライラ中だからぶっ飛ばす。」
「あいつ、調子に乗ってるな。」
「はっ、あんなヘロヘロしたやつさっさとボッコボコにしてやるぜ。」
――ああ、お望みどおりにしてやるよ！
奥のチンピラに渾身の右ストレートを食らわせられる。何だ正直大したことないな、痛いけど……。
問題ない、敢えて男達に先に攻撃をさせたまで。
つまり作戦はこうだ。
1．まず男達に俺をボコボコにしてもらい勝ちを確証してもらう。
2．油断した所をカウンターで反撃。
3．後は全力でボコる。
どうだ、この完璧（？）な作戦！　自分を囮にして戦いを制す、何と自暴自棄な作戦！
だが、ちゃんと理由はある。
第一に予め相手の強さをリサーチすることが出来る事、第二に相手が凶器を持っていた場合の対処がし易いことだ。
ただし、序盤から凶器を使ってくる馬鹿は正々堂々ボコすけどな！
一応こう見えても柔道５段ですから……、平凡な人にも多少は意地だってあるんだぜ。
そんな訳で取り敢えず俺は先程の男みたいにボコボコにされてみた。
勿論こう見えても急所は基本隠しているんだぜ、凄いだろ。
「オラオラ！　さっきまでの威勢はどうしたんだよぉ！」
――いや、手を抜いてるだけです。ホントスミマセン。
「へっ、大したことないくせに調子乗りやがって！」
――貴方のほうが、大したことないですー。ちょっと痛いけど……。
「全くさっきはふざけた真似してくれたな！　だったらお前が出すも

ん出せや！」
「こ、こう見えても、い、いち、一文無しなんで、ね。」（演技）
「チッ、それにしても何処と無く珍しい格好してんな。どうせならその服を貰おうかな。」
――では、後で貴方の服を貰いますね。……ゴメン、やっぱいらない。
「おっ、それ良いねぇ！　安心しろ、パンツまでは取らねぇから。」
「あ？」
「何だ文句あるのかぁ!?」
――アリアリだ、バーカ！　そこまでして金が稼ぎたいのかお前ら！
チンピラどもはリュウヤの事を容赦なく蹴りつけているつもりなのだろう。
だが、彼には全くのダメージが入っていないのも事実。何故ならそれなりに鍛えていたからだ。
どちらかと言うと問題はナイフなどの凶器で脅されないかだ、元の世界では一度ナイフで切られた事があるがあれは中々の痛さだった。
誰に切られたかって？　大丈夫、ちょっとした通り魔事件と出くわしただけだから、ちゃんと解決しましたけどね。
しかし、襲われているのがリュウヤで無かったことを想像するとこれまた恐ろしい。あの時の様子は鮮明に頭に焼き付けられている。
だからこそナイフが出てくるのであれば早々に対処しなければ、アレぐらい痛いのは勘弁！
「さてと、じゃあ早速剥ぎ取らせてもらいますかね！」
そう言ってチンピラがナイフを取り出したのが見えた。
時は来た、作戦通りカウンターを食らわそうとした――その時だ。
「ちょっと邪魔！　どきなさいよ！」
とてつもない速さで誰かが走ってくるのがわかった。
驚いて顔を上げるチンピラ達を横目でその姿を確認しようとする。
見た感じ、頭髪は赤色でセミロング、その下の真っすぐで頑固そうな瞳も赤色、そしてまあまあ小柄で少女、服はちょっと汚らしいけど

多分結構な美少女だと思う。
　そんな少女に見とれていた次の瞬間、その少女は倒れているリュウヤを見ること無くそのまま踏みつけてきたのだ。
「ぐふぉ!!」
「あっ、わりぃ、でも今アタシ急いでるからゴメンな!」
「ゴメンなで済むかぁ!!　後で覚えてやがれぇ!!」
　反射的にリュウヤはその場から素早く起き上がり、彼女を追って文句の一つも言ってやろうとした。
　が、既に時遅しで踏みつけた後も彼女はスピードを緩めること無くこの細い路地裏の奥へと走っていった。
　そもそも彼女のスピードに追いつけるように気がしなかったのも事実。ここは諦めるしか無い。
　そして同時にもう一つの問題も発生した。
「あ、あいつまだピンピンしてやがる……。」
「あっ、演技するの忘れてた。」
　チンピラどもは唖然とした表情でリュウヤのことを見つめていた。
　まさに音速と同じレベルで通過していった少女もそうだが、チンピラはそれ以上に彼のことを注視していた。
　――そんなに不思議か?　俺がピンピンしているのが。まあ、確かに俺としては最高の演技だったけどさあ。
　だが、この状況はナイフ持ちの奴と対等に戦わなければならないという事実を突きつけられたのと全くの同意義である。
「チッ。あの少女、本当に覚えておけよ。」
「テメェ、また調子に乗りやがって。血だらけになってでもやるか?」
「えっ?　あっ、確かに血出てるけど、これで血だらけって言わないでしょ。」
「なに訳の分からない事言ってんだ、取り敢えずぶち殺す!」
　そう言ってチンピラどもは再びリュウヤに襲い掛かってきた。
　これ以上は仕方ないと覚悟を決め、いつもの柔道の構えで迎え撃とうとする。
　本気を出したくは無かったけどこんな状況に陥れられてしまった

からには出す以外の選択肢はない。
平凡は何にだってなれるって事を今ここで証明してやるぜ！
彼のモットーを掲げ、地を蹴ろうとしたその瞬間だった。
「――そこまでよ。」
凛とした声が細い路地裏に響き渡り、その場にいた全ての人が凍りついた。

第1章　4話　最悪にして最高の展開

リュウヤは反射的に声のした方を見る。そこには少女が一人、仁王立ちしていた。

一言でまとめれば超美少女だった。

腰まで届く白色のロングヘアー、そして理性と知性両方兼ね備えたような藍色の瞳がこちらを見ていた。そのしっかりとした顔立ちは美しくもあり、何処か幼さを残している様にも思える。何よりも彼女の頭からは可愛らしい柴犬系の犬耳が生えていた、尻尾はこちらからは見えないが恐らく生えているのだろう。

身長は１６０センチ前後だろう、服装は一見高貴そうにも見えるが派手な装飾は施されていなかったがそれが逆に彼女の魅力を引き立てているようにも見える。水色を基調とするふんわりとしたワンピースの上に少し黄色がかったジャケットを羽織っていて可愛らしさを演出していた。

しかし、ただ可愛いだけではなかった。彼女は存在感を際立たせながらもこの場に圧倒的な威圧感を生み出していた、あのイケメンの様に……。

――強い。

その威圧感だけでリュウヤは確信した。先程のオズワルドもそうだが気迫に満ちあふれているその様は常人離れしているのだ。

「貴方達、これ以上の愚行は許さないわよ。よってかかって一人を虐めるなんて人として最低だと思わないの？」

凛とした声が再び路地裏に響き渡った、それはこの場にいる全ての人の心に響いたことだろう。

現にリュウヤもその存在感にただただ見入っていた。その存在感は彼と比べて雲泥の差である事は言うまでもない。

「あ？　女だからって調子に乗ってんじゃねぇぞ！」

ナイフを持ったチンピラが彼女を一瞥するとその刃先を彼女に向けた。

無論、彼女はその様子を静かに見ていた・

愚かだ、何処までも愚かだ。
この威圧感を感じ取れてさえもいないのかあのチンピラは……。
普通だった、逃げ出す場面だろう。なのにそれでもナイフを向けるなんて本当に怖いもの知らずなんだな。
彼女は小さくため息を付くと再び口を開いた。
「最後に忠告するわ。今すぐにそのナイフを捨ててこの場を去りなさい。大丈夫、別に命まで取ろうとしていないから――少なくとも今はね。」
少女はその場から微動だにせず、彼女の視線は変わらず俺達の事を見据えていた。
だが、確実と言ってもいいほどこの場の大気の流れは変わり始めていた。そう、言葉にすることが出来ない何かがこの場に集ってきていた。
「生意気な口利きやがって！　目にものを見せてやる！」
遂に一番前のチンピラは前に出るとナイフを大きく振りかぶり、彼女を切りつけようと襲いかかった。
だが次の瞬間、彼女の前に薄水色に光る壁が出現した。ナイフはその壁に当たった瞬間、金属音を鳴らしてはじけ飛んだ。
「なっ……！」
チンピラは今正に起きた出来事も飲み込めないでいた。だが次の瞬間、そのだらしない顔から血の気が引いていくのが分かった。
「べ、別に私一人でも出来たのに……。」
「いいや、君の事を守るのが僕の使命だからさ。一先ず安全確保といった所かな。」
後ろに一歩後退した彼女の前には何やら小動物が二足歩行状態で浮いていた。
一見は狼、にも見えるが何処と無く兎にも見えた。少なくとも後ろ足と尻尾は兎だった、それ以外は多分狼……。
毛並みは水色で目は狼ほど鋭いものではなかった、寧ろ可愛らしさを演出しているようにも思える。鼻はピンク色で色々と元の世界との動物とは大きく違って奇妙であるが可愛らしい容姿だった。

「せ、精霊……、だと!?」
「そうそう、よく分かったね！　折角だしご褒美でもあげちゃおっかな。」
精霊と呼ばれた小さな狼（？）はそう言うと静かに手（前足）を合わせた。
刹那――その狼（？）の周りには何やら小さな水の塊が４つほど生成され、グルグルと回り始めた。
リュウヤはその様子をポカーンと見ていると急にその水の塊は凝固し始めた鋭利な氷の刃と化した。
その刃は何処と無く先程のナイフよりも光り輝いているような気がした。
「く、クソッ！　覚えてやがれ！　今度あったら絶対にぶち殺す。」
そう言うとチンピラどもは一目散に裏路地の奥へと逃げていった。
「この子に手出したらこっちもただじゃ置かないからね、多分氷漬けだけじゃ済まされないかな。」
「コラッ、変なこと言わないの！」
「痛っ、ちょっと何するのさ～。ただの脅し文句だって……。」
二人はそんなコントみたいな事をしてクスクスと笑いあっていた。
その割にはあの精霊、結構本気で言ってそうだったから逆に怖い。
それに先程の氷の刃はいつの間にかどこかに消えていた。一体どんな原理なのだろうか……。
だが正直自分の獲物を取られたような気がしてならない、あれぐらいは多分リュウヤ位が丁度だっただろう。
兎も角、お礼は言わなければ……。
彼は体の周りのホコリや汚れを払うと少女に向き直った。
「スマン、助けてくれてありがとな。」
「どういたしまして。それにしても、こんな所に一人で入っちゃ危ないよ？　この国、最近治安が悪いからああいう連中が一杯いるからね。」
「ああ、今度からは気をつけるよ。」
実際は男の人を助けに来たんだけどね。

だが、ここでそれを言ってしまうと更にかっこ悪くなるから内緒にしておこう。
それはそうとして、今正にこちらを見ている彼女の藍色の瞳はとても美しかった。
慣れていないっちゃ慣れていないがここで顔を背けると逆に恥ずかしいため敢えて我慢する。
「ふふっ、今回は僕のお手柄だったね。」
「カリフが勝手にやっただけでしょ！　それにあそこまでしなくたっていいのに、マナの無駄使いじゃない！」
「まあまあ、良いじゃない。こんな国で僕の魔力を全て使うような大事なんて起きたりしないよ。」
――その言葉、完全にフラグだよな。今さらっとフラグ建築したよな。
そして不意に彼女の眼差しが真剣なものとなるのが分かった。リュウヤは気持ち的に軽く身構える。
「所で、さっきこの場所を物凄い速さで走っていった人知らない？」
「物凄い速さでか……、ああ！　あのさっき俺の顔を踏んだ赤髪の少女の事か？」
「ビンゴだ、少年！　して、その少女は何処に？」
やはり、美少女二連続だけあって無関係ではないらしい。
だが実際俺は顔を踏みつけられたせいで彼女が向かった方向を全くと言ってもいいほど覚えていない。
何だか申し訳ない感じだ……。
「いや、この路地を置くに行ったのは確かだがそれ以降は……ッ！」
その時、突然目の前の視界がぼやけた。そしてそのままリュウヤは地面に倒れ込んでしまった。
地面に衝突して、鈍い痛みが体中を走っていくのがわかった。
受け身取ってなかったか……、それにあれだ。ここで目眩か、不幸にも程があるって奴だ……。
「だ、大丈夫!?」
「あっ、うん。今視界が物凄くぼやけているけど大丈夫。取り敢えず

君は行きなよ。追ってるんだろ？　あの少女を……。」
「視界がぼやけてるって重症じゃない、そんな人を置いて行ける訳ないでしょ！　早く何とかしないと……！」
「それに見たところ傷も中々多いじゃないか。フローラ、君がその気なら僕も手伝うよ。」
「ありがとう！　兎も角、楽な体勢にさせないと……。」
――この状態……、俺確実に駄目なことしちゃった感じだよね!?
この子が急いでる所を引き止めちゃったよね!?
そんな事を考えながらリュウヤはゆっくりと目を閉じた。
立ちくらみは変に動くと余計気持ち悪くなるからここはお言葉に甘えて楽にさせてもらうか。
「マナまだ切らして無いでしょうね？」
「精霊カリフ様も舐めてもらっては困るね！　これぐらいの傷なら朝飯前だぜ。」
「うん！　なら二人がかりで治すわよ！」
二人の落ち着いた声が聞こえてくる。
流石は異世界だな……、こんな可愛い子が存在するとはね。
そんなくだらない事を考えながらリュウヤは意識を手放した。

第1章　5話　美少女と罪悪感

あれからどれ位の時間が経っただろうか。
３０分以上か、いやもしかしたら5分も経っていないのかもしれない。
リュウヤは意識が覚醒させ、治療が終わったことを確信した所でゆっくりと目を開けた。１０分仮眠は電車の中でよくやることだから特に不満も何も無かった。
「あっ、目を覚ましたよ。」
目の前にはあの精霊が嬉しいそうな表情でリュウヤを指差していた、どうやらずっと看病していてくれたようだ。
壁に寄りかかっていたせいか、若干首が痛かったがそれ以外は痛みどころか傷その物が消えていた。
「良かった、急に倒れたからビックリしたんだよ？」
「どうせなら膝枕が良かった……。」
「えっ？」
「い、いや何でもない！　ただの戯れ言だ。」
ファンタジーとかで良くある事だが、いやそもそも元の世界でも成り立つ原理だが、展開的に膝枕してくれたって良いんじゃないかと思ったがそれは平凡な彼にとっては夢のまた夢の事である。
煩悩を捨てきれていませんな、これは最近修行をサボっていたせいなのか？
リュウヤが極めた宗教、名付けて『平凡教へいぼんきょう』。平凡を極めることこそ真の至福なり！
修行内容、変なこと考えない、自分を平凡とし続けるなど……。
いや、これもド平凡の戯れ言だけどね。
「ふう、一先ずは大丈夫そうだ。傷が多かったにも関わらず治るの速かったし、後遺症も無いだろうね。」
「あったらあったで怖いな……。それにしても、また助けられちゃったな。本当にありがとうな。」
「良いよ、良いよ！　兎も角、元気になったみたいだし良かった……。」

白髪の美少女もとい獣人は可愛らしく笑って見せてくれた。
彼女には本当に世話になった。急いでいたはずなのに、大して傷ついてもいないこんな平凡な奴を看病するなんて本当に優しい性格の持ち主なのだろう。そう言えばこんな性格の奴さっきもどっかで見たような……。
「それにしても、君の派手にやられたね。あんなクズ野郎はこの世から消えるべきだ。」
「お、お前シレッと怖いこと言うなよ！　だけど、何か憎めないな……。」
「ふっふっふ。この僕の可愛らしさはどんな人でもひれ伏せる力があるのだー！　どうだ、凄いだろー！」
「その代わり裏ではとんでもなくどす黒い事を考えていると……、なるほどなるほど。」
「いやいや別にいつもそんな事を考えている訳じゃないよ？　今のは軽いジョークさ。」
そこは完全否定するべきだろと突っ込みたくなる。
でも実際、こんなユーモア溢れる精霊が近くにいると退屈はしなさそうだった。
――精霊か。この世界にはどうやら物理法則無視の生命体が存在する様だ。この様子じゃ元の世界の物理法則はもはや当てはめるべきではないだろうな。
リュウヤはゆっくりと立ち上がり周りを見渡した、場所が変わっている気配はないのでその場で治療してくれたのだろう。
「なんか申し訳ないな……、結局は目が覚めるまで居てもらってさ。別に俺を置いて行っても良かったんだぜ？」
「か、勘違いしないでよね！　今の私達には貴方が必要と判断したの、それだけの話しよ。だって私達が追っている少女の特徴を知っているのは貴方とあのチンピラだけだろうし……。」
――な、何故にここでツンデレ化するの!?
美少女はリュウヤから目線を逸しながら念を押すかのようにそう言った。顔が若干赤くなっている所を見るとやっぱり照れているの

だろう、遂に耐えられなくなったと言うところだろうか。
　だけど、そんな照れている顔も美少女だけあって可愛かった。
「治癒魔法か……、凄いな。」
「まあね！　この僕にかかればこんな魔法チョチョイのチョイさ。」
「カリフは存在その物が魔法みたいな存在だかね。」
「へへ、やめろよ、照れちゃうでしょ！」
　宙に浮きながらその精霊は照れる仕草で頭を掻いていた。
　だけど、今の照れるところなのか？　それともただ単にジョークを挟んでいるだけなのか？　そこが疑問として残る。
「それで、その赤髪の少女の特徴覚えてたりする？」
「勿論だ、あいつには借りがあるからな。ちょっくら説教でもしないと気が済まん！」
「どうしたの？　何かあの少女に恨みでもあるのか？」
「当たり前だ、堂々と俺の顔踏んで走っていったからな！　下見て歩けってんだ！」
　こう思うのも女性に対しては失礼だが後もう少し彼女の体重が重ければ俺の顔面の骨はバキバキに割れていた、もしくは当たりどころが悪ければ失明していた可能性は否定できない。そうしたら元の世界では警察沙汰だっただろう。
「いやいや、歩いてはいなかったでしょ？」
「あっ、そうだった。ハハハハッ！」
「ちょっと、二人で勝手に話そらさないでよ！　それで、どうだったの？」
　ちょこっと怒った顔で彼女はリュウヤに顔を近づけてきた。突然の彼女の行動にリュウヤはドギマギして顔を赤くしながら顔を背けた。
　流石に美少女に直線距離１０センチ程まで顔を近づけられたら誰であろうとも慌ててしまうだろう。
　あっ、それはイケメンでも同じか。違う意味で。
「ちょっと？　何かやましい事でもあるの？」
「いや、その、顔近いって！」

「あっ、ゴメンゴメン。ついね……。」
　ついついやってしまうじゃ済まされないからなその行為、普通の男だった一発で落ちちゃう所だからな！
　心のなかで大きく叫びながらリュウヤはあの無礼極まりない赤髪少女の特徴を思い出す。
「赤髪のセミロングで、意地強そうな感じ。後、髪は結んでいなくてピンはしていたみたいだった。服は汚らしい感じだったけど見た目は案外綺麗な方。っとこんな感じかな。」
「なるほど……、ありがとうね！　それでもう一つ、十字形で真ん中に綺麗な青色の宝石が埋め込まれた金色のネックレスは見なかった？」
　リュウヤは美少女の期待に応えるため、小一時間の記憶を全て洗いざらい思い出し、条件を満たす様なネックレスを隈無く探した。だが、そもそもネックレス事態を見ている覚えがなく残念ながら情報は皆無だった。
　よって残念ながら彼は美少女の求める答えを得ることが出来なかった。
「すまない、そのようなネックレスは見た覚えがない。因みにそれがあの赤髪の少女が奪った物なのか？」
「うん、こんな所をわざわざ通って逃げるぐらいだから多分ね。そっかー、知らなかったか。まあ、仕方ないわね。」
　残念そうな表情を浮かべながら彼女はため息をついた。
　落胆させてしまったか、リュウヤは罪悪感で押し潰されそうな気持ちになっていた。
「それじゃ、私達はもう行くわね。色々とありがとう、後こんな人気のない様な路地裏には一人では入らないこと！　いつも助けてくれる人が近くにいるとは限らないんだからね、それに一人で入るなんて死にたいって言っているのと全く同じだから……。絶対入っちゃ駄目だからね！」
　何度も念を押すかのように彼女に言われて、リュウヤは何も言う事が出来ず押し黙ってしまった。
　兎も角、今回の件を通じてあの自暴自棄作戦はこの世界じゃ通用し

ない（他人に迷惑を掛ける）事がよく分かった。これからは慎むことにしよう。
だが、彼は納得していなかった。こんなに迷惑を掛けたのにも関わらず自分は何もしなくて良いのか？
今、自分に出来ることはなんだ？
「それじゃ、カリフ。行くよ。」
「おう！　――ゴメンよ、本当なら家まで送ってあげたい所だけど……。それじゃ、気をつけろよ！」
長い白髪を綺麗に揺らしながら彼女は身を翻して路地裏の出口へと向かった。そしてその颯爽とした彼女の背中を追うかのように精霊も飛んでいった。
スリ、もとい物取りにあいネックレスを奪われた彼女はその犯人を追っていた。
その途中で無様にチンピラ共に襲われているリュウヤを助け、更には大した傷でもないのに治療をしてくれた。
もしかしたらリュウヤが事を起こしていなければ彼女はあの赤髪の少女に追いついていたかもしれない。だがその少女は既に何処か遠くに行ってしまっているだろう。
優しいにも程がある。普通ならそんな面倒な事するはずがない。俺なら今急いでいるからと言って犯人を追っていたに違いない。
そんな助けられてばかりでいいのか？　他人の時間を奪っておいて俺はのうのうと鑑定屋にでも行くのか？
出来るわけがない！　ならばやることは一つだ。
「チッ、面倒くせぇ!!」
そんな事、ちっとも思っていないのにも関わらずリュウヤそう呟くとブレザーの汚れは再び払うと隠しておいたリュックサックを拾い上げて背中に背負う。
人助けで定評のある俺をも凌駕する優しさ、しかと見届けたぞ！
体を軽く動かし、治癒魔法の素晴らしさを実感するとともにリュウヤは地を蹴った。

第1章　6話　人助けリベンジ

リュウヤは全速力で走り出すと元の大通りに出る。
だが既にそこにはあの白髪の美少女獣人と狼のような精霊の姿は何処にも無かった。恐らく、あの赤髪の少女を追うために走っていったのだろう。
「チッ、時既に遅しかよ！」
改めて周りを見渡すが美少女の姿は確認できなかった。なにせ、あそこまでの美少女なのだ例え目立たない色の髪の毛をしていようと直ぐに分かるはずだ。
なら答えは一つ、既に何処かの角を曲がったのだろう。これでは彼女の姿は追うことはほぼ不可能、と言う訳でもない。
彼女の目的はあの赤髪の少女を追うこと、ならばあの少女が行った先。即ち、あの路地裏の繋がる場所へと向かうのが普通だろう。
「スミマセン！　ちょっとお伺いしたいことがあるのですが……！」
リュウヤはすぐ近くに居たリザードマンっぽい亜人に話しかける。
取り敢えず、情報を得ることが最優先だ。人見知りとかトカゲ嫌いとか言い訳している場合ではない。
「ん？　どうした兄ちゃん。」
「あの路地裏は何処に繋がっているんですか!?」
「へ、変なこと聞くなぁ。この先の角を右に曲がってちょっと行った所だぞ。」
「あ、ありがとうございます！」
当たり前っちゃ当たり前の話だ。だが、この国の土地勘がゼロの彼にとってはこんな単純な事であろうとも重要な情報となってくる。
リュウヤは直ぐ様その曲がり角の存在を確認すると、地を蹴り走り始めた。運がよいことに人は商い通り程多くなく走ってもぶつかることは殆ど無いだろう。
ならば、スピードは全速力だ！　リュウヤは出すことの出来る限界のスピードまで数秒で加速して走っていった。
追いかけてまでもお礼をしなければ気が済まない。だからこの罪

悪感を沈めて、自分を納得するためにも彼はあの美少女を追いかけなければならなかった。
「――あの兄ちゃん足速いな……。」
　男のリザードマンはそう呟いたがその声がリュウヤに聞こえることは絶対に有り得なかった。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※
※

「駄目だ、全然見つからねぇ！」
　リュウヤは一人、街のど真ん中で再び彷徨っていた。相変わらず、周囲から物珍しさ故に多くの視線を集めていた。
　だが、そんな事を気にしている余裕など彼には存在しなかった。彼が探している人、美少女と精霊が一向に見つからないのだ。
　もうこれは完全に見失ったと言わざるを得ない状況だった。
　あれから色々な人に尋ね、彼女の居場所を探ろうとした。
　だが、やはり決断が遅かったせいか彼女に追いつくことおろか彼女が向かう先までも見失ってしまった。
　これだから俺は……、全く何と情けない野郎なんだ！
　リュウヤは自分の愚かさを嘆いた、しかしどうこうしたって時が戻ることはない。ならばこれからの事を考えなければ……。
　現実逃避中の彼が再び捜索に戻ろうとしたその時――
「うわあああああん!!　お父さああん、お母さあああん!!」
　あの時とほぼ同じ、かすかではあるがそんな声が耳に入ってきた。
　恐らく迷子にでもなってしまったのだろう。
　だが、ここでこの子に構っていたらあの美少女と会うことはもう出来なくなるだろう。
　究極の二択問題だ、さてどちらを選ぶか。
「……。」
　一人、子供の声のする方を見て考えた。
　確かにここで彼女を探した方が結果的にはリュウヤの良い方向に

傾くかもしれない。
だが、彼の頭の中で『それ』は引っかかっていた。
あの時、彼女だって急いでいた。それなのに彼女は人助けと情報収集という名目でリュウヤを助けた。
彼女にとって収穫は赤髪の少女の特徴だけであって、犯人を見逃してかつリュウヤの治療に関わった事を考慮すると損得でいえばぶっちぎりの損だろう。
そう、それが結果的にリュウヤを動かす原動力となったのだ。
善行をすれば必ず自分に返ってくる。いっちょそれだけを信じてやりますか。
「全く、面倒だな。」
いつもの決まり文句を呟くとリュウヤはその泣いている子供の元へと向かった。
子供は通りの端でメソメソと泣いている。外見からして5，6歳で人間の男の子といった所だ。
「僕、大丈夫か？　お父さんやお母さんとはぐちゃったのかい？」
リュウヤは子供のそばに駆け寄ってしゃがみ込み、目線の高さを合わせて話しかけた。子供は泣き続けながら小さく頷く。
「そうか、ならこのお兄ちゃんも一緒に探してあげるよ。」
「……、本当？」
「ああ、二人で探せばきっと見つかるはずさ！　おっとその前にこのアメでも舐めると良い、美味しいからな。」
偶々リュックサックの中に入っていたアメを一つ取り出し、子供の手に握らせた。
だが、子供はそのアメを見ても浮かない顔をしていた。
「これ……、何？」
「あ、そうか、この世界にはアメは無いのか……。それはあれだ、無くなるまでしゃぶって食べるお菓子だ。美味しいぞ。」
リュウヤはアメの袋を開けて中身を子供に優しく手渡した。
子供は怪訝そうな顔をしながらも恐る恐るとそのアメを口の中に入れてしゃぶり始めた。

「……、美味しい。」
「だろう？　さてとじゃあお父さん、お母さん探しと行こうじゃないか！」
「うん！」
　何とか子供の笑顔を取り戻し、ホッとする反面これまでにやったことのない大きなミッションに彼はプレッシャーを抱えながらも立ち上がった。そして優しく子供の手を握ってあげる。
　先程までの美少女探しは情報があった、しかし見つけることは出来なかった。
　そして今回は情報なしでの人探しだ、はっきり言って難易度ルナティック、ほぼ不可能。
　だけど、やると言ったからには絶対にやり遂げるつもりだ。平凡を極めしもの、諦めることなど絶対に許されない。
　それに――
　思い出したくもない過去を回想しそうになりリュウヤは無意識に頭を抑えた。
　そう、あれだけは思い出したくない。最悪にして最低な黒歴史だ。あれを思い出すことも繰り返す事も絶対にあってはならない。
　だから、諦めるわけにはいかない！
「お父さんはどんな人なのかな？」
「……うーんと、緑色の髪の毛でカッコイイ人！」
「そうか、分かった。頑張って探してみるよ。それと――」
　――緑色か……、そう言えばチンピラから助けたあの男の人も緑だったな。
　リュウヤは横にいる子供を軽く持ち上げると自分の肩に乗せた、所謂肩車というやつだ。
　子供あやしにおいて定番な行動であるが今回はそれが目的ではない。
「うわぁー！　たか～い！」
「お兄ちゃんの上からお父さんを探すんだ、そうすれば早く見つかるだろう？」

「うん！　ありがとう、お兄ちゃん！」
　多少口ごもりながらも子供はそう元気に答えた。アメを舐めているのだから仕方があるまい。
　そしてリュウヤは子供が元気になったことに胸を撫で下ろすとともに自分の目の前の光景に条件を満たす人が居ないか探し始めた。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

　それから子供の親を探すこと３０分、似ている人はいくらかいたようだが父親、母親らしき人は見つからなかった。
「お父さん、お母さんいるかい？」
「……ううん、いない。」
「そうか。安心しろ、このお兄ちゃんが絶対に見つけてやるからな！」
　肩に乗っているため顔を見ることは出来なかったが子供の元気が段々と無くなっているのが分かった。
　このままではいつ泣き出すかわからない。やはりここは敢えて移動しないという手を取った方が賢明なのかもしれない。
　昔、自分が迷子になった時にやった対処法だ。そう、相手も探しているのだから動いてはすれ違って逆効果。そのため、敢えてその場に待機することによって相手に見つけてもらう事が出来る。しかし、これは相手もその場に待機していた場合は更に面倒なことになる。
　だが、今回探しているのはお父さんとお母さん、即ち二人だ。なので相手が余程の馬鹿でなければその場で待機していた方が良いということになる。
　それなら早速実行しよう……。
「なあ、僕――。」
　リュウヤが言いかけた時だ。
「だ、誰か！　助けてくれぇ！」
　かすかにそんな声が聞こえてきた。しかも、数時間前聞いた声と全く同じのが。

……、これはデジャヴ、デジャヴなのか？　俺はある時間をループする特殊能力でも持っているのか？
で、でも流石に同じ人じゃ……、無いよね。
「ねぇ、お兄ちゃん。」
「ん、どうした？」
「……、今助けてーって聞こえた。」
「ああ、そうだな。」
「その声お父さんに似てる……。」
「はあ!?」
リュウヤの脳全体を何やら嫌な考えが走り抜けていった。
完全にデジャヴだよな……、これ。
だけど、どちらにせよ。放っておくという選択肢は存在し得ない！
「あっ、そっちは……！」
「ああ、普通なら入っちゃいけない場所だ！　だけど、助けを求められた以上入るしか無いんだ。だから少しだけ我慢してくれ、僕！」
「う、うん！」
リュウヤは戦う覚悟を決めると肩車をしたまま路地裏へと走っていった。

第1章　7話　完全なるデジャヴ

「またノコノコとやって来やがって舐めてんのかお前！」
「オラオラァ！　今度こそ出すもん出せってんだ！」
「か、勘弁したください……。私はただ……。」
「黙れ！　お前のせいで痛い目に遭ったんだよ、今回は容赦しねぇ！」
見るとそこでは4人がかりで1人の緑髪の男をよってかかって攻撃しているのがわかった。
何処からどう見ても完全なるデジャヴだった。
襲われている男からタコ殴りにしているチンピラ共まで何もかもが一緒だった。
――とことん懲りない奴らだな……。
リュウヤの怒りのボルテージが徐々に上がっていった。あの美少女と精霊に散々言われたのにも関わらずその影で更に暴行を加えるなんて人間のクズだ。しかも同じ人を……、この時点でこいつらは人間以下と言っても過言ではない。
「なぁ、あれは『僕』のお父さんか？」
「……、うん。お父さんだ！　お父さんが悪い人に虐められてる！」
「そうか……。」
子供を怖がらせないように彼は静かにそう言った。そしてゆっくりと子供に地面に下ろすと同時に「持っていて」と言って自分のリュックサックを預ける。
「よし、じゃあ僕はここで隠れてて。今からあの悪者たちを退治してお父さんを助けてくるからね。」
「……、うん。分かった。」
子供は既に半泣き状態だった。やはりお父さんがボコボコにされて悔しいのだろう。
だが、子供は非力。この子があのチンピラ共に立ち向かっても到底勝てる訳がない。そこでリュウヤの出番だった。
「いいかい？　お兄ちゃんかお父さんが良いと言うまで出ちゃ駄目だぞ。約束できる？」

「うん……、分かった。」
「良しいい子だね……。じゃあ、行ってくる。」
静かに立ち上がると彼はニコッと笑ってチンピラ達の方にゆっくりと歩いていった。
だが、子供から見えなくなった場所でリュウヤはその作り笑顔を完全に崩す。またリュウヤの頭の中でプチッという破裂音が鳴り響いた。
彼の怒りのボルテージはとうとう振り切り、堪忍袋ははち切れた。
キレるのはこれで人生二度目だな。
指をボキボキと鳴らすと理性を失わぬように我慢しながら今正に暴行を行っている分からず屋のチンピラ共に近づいていった。
今起きている事全てに対して彼はどうしようもない見覚えがある。それもそのはず、これはデジャヴなのだから。
「複数人でよってかかって一人を甚振るのは止めろよ。」
あの時言ったセリフとほぼ同じ、だが声を低くし、ドスの利いた声で彼はそう言った。
「ああ？　何だテメェは？　って、あの時のヒョロ男じゃねぇか！」
「チッ、どいつもこいつも調子乗りやがって。だが丁度いい、今俺らはあの尼に脅されて頭にきてんだ、またボコボコにしてやるよ！」
リュウヤは静かに舌打ちすると地を蹴った、そして先程と同じように前のチンピラ二人に回し蹴りを食らわせ、そのままがら空きの胴体に右ストレートを打ち込み、壁に叩きつけた。
「おい、父親さん。取り敢えず、下がっておけ。言っておくけど、後で話あるから逃げんなよ。」
「ひぃ！　は、はい！」
そう言うと緑髪の男は立ち上がり一目散にその場を離れていった。
「チッ、調子に乗ってんじゃ――」
「調子に乗ってるのはお前たちの方だろうが!!　同じこと何回もやりやがって、そんなにぶっ飛ばされたいのか!?　ああ、その気ならぶっ飛ばしてやるよ!!」
「な、何だよいきなり。へっ、そっちがその気なら目にものを見せてや

る。」
　そう言うと一番奥のチンピラは腰からナイフを抜いた。だが、それも数時間前経験済みである。
　よってリュウヤは近くに置いていた木の棒を足で蹴り上げ、空中に浮かせた。そして何食わぬ顔でそれを華麗にキャッチして構える。
「木の棒一本でやろうってか？　そんなんで俺らに勝てるとでも――」
「黙れ、こっちは剣道5段だぞ。この棒一切れだけでもお前を死の淵に追いやることだって出来るんだよ。まあ、ただでさえあの美少女の威厳すらも分からなかった奴らがこの凄さを理解できるとは思えないけどな。安心しろ、命までは取らねぇ。だが、地獄は見せてやるよ！」
「ガタガタうるせぇんだよ!!」
　奥のチンピラが真っ赤な顔でナイフを振りかぶり、突進してきた。
――遅い、それでこの俺を倒そうってか？　剣道5段も舐められたものだな。
　チンピラがナイフを振り下ろそうとした刹那――リュウヤは手に持っている棒切れをゆっくりと振り下ろした。
「小手。」
　抑揚のこもっていない声で低くそう呟く。
　次の瞬間、チンピラの右手首辺りにに超スピードで振り上げられた棒切れがぶつかり、チンピラの持つナイフは金属音を立てて弾き飛ばされた。それはほんの数秒の出来事であり、残り3人のチンピラは何が起きたのか全く分からない様子でいた。
「イデデデデ……!!」
　チンピラは右手首を抑えて痛がり、その場で暴れだした。その光景を見たもの全て凍りつかせるような冷たい目でリュウヤは見ていた。
「残念だけど、俺はあの美少女や精霊と違ってそこまで優しくはない。だから……、覚悟しろよ？」
　言い終えると同時に棒切れをチンピラ共に向かって投げ、そのまま目の前で騒いでいるチンピラの顎を渾身の掌底で跳ね飛ばし、露わに

なった喉仏に狙いを定め、強烈なハイキックをお見舞いする。チンピラはそのまま何もすることが出来ずただ虚空をだらし無く彷徨った挙句地面に激突させられる、そしてそのまま意識を失った。
「て、てめぇ……、よくも……！」
「それはこっちのセリフだ可燃物共が。」
チンピラ共を目を細めて一瞥した直後、手前二人のチンピの足を払いその勢いに任せて奥の三人目のチンピラに腹パン、そしてそのまま顎を綺麗に蹴り上げ、喉仏を渾身の掌底で打撃しトドメを刺す。
「あ、ああ……。」
転んだ二人のチンピラは恐怖の余り顔を真っ青にして互いにガタガタと震えていた。リュウヤはゆっくりと身を翻してその冷たい目線でチンピラ共を無言で見下ろす。
リュウヤにとって、街をただほっつき歩いているような不良や大して戦闘知識のない殺人鬼はただのウォーミングアップ相手にしか過ぎない。この手の相手は基本スキだらけで軽く喉仏を殴っただけでも気絶してしまう様な雑魚だ、恐るるに足りない。
「知ってるか？　人間って喉仏に向かって正拳突きすると普通に気絶するんだよ、何なら君達にも試してあげようか？」
平凡を遥かに通り越した狂気に満ちた顔でリュウヤはドスの利いた声を発すると、チンピラ共の顔に明らかな動揺が走るのが分かった。
ここまで脅せば戦闘不能はほぼ確実だろう。
「く、クソッ！　に、に、逃げるぞ！」
「お、おう!!」
チンピラ二人は気絶している奴らを担ぎ上げるとこちらには目もくれず丸で何やら悍ましいものから逃げるようにその場を離れていった。
「人間の可燃物は地獄で燃やされて灰にでもなっちまえ。」
ため息をフーっとつきながらリュウヤは自分の気持ちを落ち着かせた、そして軽く辺りを見回すとともに先程助け出したあの子供の父親の元へと歩いていった。

「あ、あ、あ、ありがとうございます！　た、た、助けて下さって！」
「心外だな、そんなに怖がらなくったっていいじゃないか……。ほら、あれだよ！　ちょっと偶々苛ついてたからキレてみたってやつ。」
「そ、そうですか……。それで話というのは……？」
緑髪の男は地べたに手をついて座りながらもまだ若干怯えていた。余程怖がらせてしまったようだ、申し訳ない。
――それにしても、俺そこまで恐ろしい形相していたのかな？　まあ、実際見ていないから分からないけど。
「おーい、僕！　もう出てきていいぞー！」
リュウヤは子供の隠れている方に向かって声高らかに叫んだ。すると、子供は満面の笑みで彼のリュックサックを持ったままでくるとそれを投げ捨てて父親の方へと走っていった。
「パパ、パパー!!」
「ユウヤ、ユウヤじゃないか！　良かった……。」
そして二人共抱き合ってワンワンと泣き始める。
一体この主人はどこまで気弱な性格なのだろうか。これで本当に一家の大黒柱が務まるというのか？　ちょっと鍛え直したほうが良いんじゃないの？
心のなかではそう突っ込んでおきながらリュウヤはその微笑ましい光景を温かく見守る。
――一先ず一件落着と。
一層清々しい気分になり空を静かに見上げる。日はまだ一番高い所から少し傾いた所でギラギラと輝いていた。

第1章　8話　奇跡の再開

「本当にありがとうございました！　あのチンピラから二度も助けて貰った上で私のユウヤまでも……。ありがとうございます！」
「良いってことよ、俺だってある目的があったからこうして手伝っているだけだし。喜んでくれるなら幸いです。」
「お兄ちゃん！　ありがとう！」
　子供もといユウヤと呼ばれた子は今までに無いような笑顔でリュウヤにお礼を言った。その幼く可愛らしい様子に彼もつられて笑ってしまった。
　急激に体を動かしてしまったせいが先程から全身がジンジンと痛いが、そんな痛みも吹き飛んでしまったかのようだ。
「でも、ユウヤ君。人のリュックは投げないようにね。」
「う、うん。ゴメンナサイ。」
「ふふっ、まあ良いよ。それだけ嬉しかったってことだろ？」
　言いながら、リュウヤはブレザーやネクタイ、ズボンについた汚れをはたき落とし、リュックサックのポケットから自分が持っている全てのアメを取り出す。
　今の彼にとっては大事な食料品であるが、そんな事は関係なかった。彼の行いはもはや損得関係なしの善行その物である。
「ほら、さっきのアメの残りだ。ユウヤ君に全部あげるよ。」
「えっ、いいの？」
「おう！　美味しかったんだろう？　お兄ちゃんは要らないからあげるよ。」
「わーい！　ありがとう！」
　そうはしゃぐと早速ユウヤはアメの包み紙を一つ破るとアメをしゃぶり始めた。余程気に入ったのだろうか、とても幸せそうな顔をしていた。
　どうせならこの世界に伝わっていって欲しいものだとアメマニアのリュウヤは思う。
　元の世界じゃ偶に銀座とかに行って高級アメを買うぐらいだ。相

当なアメ好きであると彼は自負している。
「取り敢えず、この路地裏から出ましょう。またいつあの可燃物共が現れるか分かりませんからね。」
「は、はい！　ユウヤ行くぞ。」
「うん！」
　三人は光が差し込んでいる路地裏の出口へと向かって歩き出した。いや、一人子供は走っていたが……。
　この路地裏を後にするのも本日二回目のことだ。そのどちらとも自ら意図して入ったわけでは無いのだけれども……、結果的には良い方向に進んでいると考えられる。
　あの子の可愛い笑顔も見れたことだし、今回の件はチャラで良いかな。一人リュウヤはそう思うのであった。
「所で父親さん。なんでこんな陰気臭い路地裏なんかに入ったりしたんだ？」
「はい。本当はこんな所近づきたくもなかったんですけど余りにもうちのユウヤが見つからないものだからこの路地裏に迷い込んだのではと心配になって……。」
「なるほどねぇ、それであの可燃物共に襲われたと……。どうやらここに一人で入ることは自殺を意味するらしいから本当に気をつけたほうが良いぞ。」
「はい、肝に銘じておきます！」
　――なんだ、とんだへっぽこ野郎だと思っていたが案外男らしい一面もあるじゃないか。
　人は見かけによらずというのは本当の事らしい。一回、襲われてしまっているのだから学習はして欲しい所だと言いたかったがそれは恐らく子供の事で前が見えなくなってしまっただけだろう。
　でも今度はもっと鍛えてから路地裏に入りましょうね。
　そして子供が路地裏から飛び出したのを見て、二人が追いかけようとしたその時だった。
「あっ！　お母さん!!」
「ユウヤ――！　ユウヤ!!」

どうやらもう一度あの感動的なシーンを見る羽目になりそうだ。
これでお母さんとも合流、事件はこれで完全に決着がついたのだ。
リュウヤが協力した時間は約４５分短そうで長い時間だった……。
何もかもでは無いかもしれないが彼は今までに感じたことが無いような爽快感を得ていた。
そして足のスピードを緩めゆっくりと路地裏から出た——その時だった。
「ふぇっ!?」
「おっ？」
ユウヤと金髪の母親が抱き合っていた横にその子は立っていた。
あの白髪の美少女が……。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

「今日は本当にありがとうございました！　これはほんのお礼です、受け取って下さい。」
父親は言い終えるとリュウヤに何やら小さなブローチらしきものを渡してきた。小さな赤色の宝石が埋め込まれたブローチだった。
不思議な輝きを放つそのブローチに惹かれ、彼はゆっくりとそれを観察する。
「いいんですか？　結構高価そうですけど。」
「はい！　お強い貴方が持っていた方がきっとブローチも喜ぶでしょうでしょうし……。」
「ブローチが喜ぶ、か……。」
幻想的で奇妙な光を放つそれは彼の体の中にある言葉にし難い何かと共鳴しあっているような気がした。だが、持っていて悪い気がしない。
リュウヤは早速そのブローチをワイシャツの胸ポケットの所に付ける。
ブローチは彼の左胸の所で日の光を反射してキラキラと輝いてい

た。
「ありがとうございます、大切にします。」
「貴方がたの御恩は絶対に忘れません！　それでは私たちはこれで――。」
「お兄ちゃん！　お姉ちゃん！　またねー！」
ユウヤはリュウヤと彼女に大きく手を振ると大通りを駆けていった、そしてそれを追いかけるかのように父親も走っていった。
母親はユウヤの元気一杯の行動を見て苦笑いしながらもこちらに「ありがとうございます。」と丁寧にお辞儀をするとゆっくりと二人の方へ歩いていった。
――それにしてもあいつ全く懲りてないな。まあ、子供は元気一杯なのが一番か……。
「それにしても、まさかこんな所で会うなんて奇遇ね。」
「ああ、俺も運命や何やらが導いた結果に非常に驚いていた所だ。」
善行をすると必ず自分に返ってくるって本当なんだなと彼はつくづく思った。
こんな幸運な事が他にあるだろうか、今正に人生全ての運を使ってしまったような気分だ。
それともこれは運命なのだろうか、いやそれはモテない男の可哀想な思い込みだな。
「しっかしボクも驚いたよ、まさか君があの路地裏のチンピラに勝つとは……。」
「おいおい、完全に俺を見くびってるだろ精霊さん！　こう見えても剣ど――剣は使える方なんだぜ！」
危うく剣道と言いそうになったリュウヤはすかさず言い直す。剣道がこの世界では通じない事はあの可燃物共で実証済みだ。
少女の横に浮いている精霊はクスクスと笑っていた、もしかしたら出くわした時から彼はリュウヤの力を見破っていたのかもしれない……。
そんな能力がこの世界に存在するかは分からないが精霊ならいとも容易くやってのけられそうだ。

「そう言えばあのお父さん、二回助けられたって言ってたけどもしかして……。あれ!? じゃあ、あれは時間の無駄だった!?」
「いやいやそんな事ないです！ 助けれて本当に助かりました！」
少女は少し慌てる様な素振りを見せた、でもそんな彼女もまたとても可愛かった。本当に何やらせても絵になるんだな、美少女って――
だがそれと同時にリュウヤはひしひしと押し寄せる罪悪感らしき物に耐えられなくなっていた。
そろそろ切り出すか――
「あれからあのネックレス探しはどうなったんだ？」
「うん……、残念ながらまだ見つかってないわ。ちょっとユウヤ君を探すのに手間取っちゃって――。」
――間接的ではあるが全て俺のせいに思えるのは気のせいだろうか……。実際はユウヤ君を連れ回していたのは俺なのだから。
色々と後悔するリュウヤだが、こうなった今それは後の祭りである。
それに面と向かって美少女と話すのに慣れていない彼はちょっとばかし冷や汗をかいていた、このままではまた貧血になってぶっ倒れそうだったので何とか話を済ませたい。
「そのだな……。今更感半端ないんだけどそのネックレス探し、俺にも協力させてくれないか？」
「えっ？ そんな、私のミスなのになんか悪いよ……。それにお礼だって出来そうにないし。」
「いや、そんな事はない。君は貴重な時間を使ってまでも俺を助けれくれたのだからこれぐらいやって当然だ！ それに犯人を一度見ている俺ならあの赤髪の少女を見つけることは容易いぜ、この国の土地勘ゼロだけど。」
冷や汗やら脇汗やらで汗だくになっているが何とか伝えたい事は言いきった。これで断られたら仕方ないが、気分は上々だ。
そんな達成感溢れているリュウヤの顔を見て少女は難しい顔をして考え始めた、しかしそんな少女の様子を見て空中にフワフワ浮いている狼（？）が柔らかそうな肉球で少女の頭を優しくつつく。

「最後のが確実に致命的な気がするけど――受け入れてもいいんじゃないか？　彼に邪念は感じない。それに手がかりほぼゼロの状況でこの広い王都を探すのも逆に無謀だしね。」
「うーん、でも何か――」
「ボクは１＋１が１未満になるとは思えないなぁ。それに彼は迷惑だなんて思ってないはずだよ、あの様子からしてさ。」
　精霊は全身が力を抜いてリラックスしているリュウヤのことは指差す。その様子を見た彼女は数秒、考えた挙句頷きリュウヤに向き直った。
「分かったわ、お礼は出来ないかもしれないけどお願いします！」
「――ああ、勿論だ！」
　こうして二人＋一匹の壮絶なネックレス探しが始まった。

第1章　9話　転移者リュウヤ

少女のネックレス探しの手伝いを申し出てから約1時間、リュウヤ達は休憩も兼ねて王都の中央広場の噴水に腰掛けていた。
「こんなに回って手がかりなしか……。すまないな、土地勘が無いばかりに。」
「大丈夫大丈夫。君は飽くまでも犯人を見分けたり目撃証言を手に入れる際に重要であって、他は初めから期待してないから。」
「おい、今の地味に傷ついたぞ精霊！　確かに事実っちゃ事実だけどもう少し遠慮というものは無いのか!?」
「冗談だよ、冗談！　イッツジョーク！　それに君が居るおかげで捜査もしやすくなっているし、感謝してるって。」
相変わらず挑発的な態度を変えようとしない精霊にリュウヤはムッとなる。
だが実際問題、捜査は今までに無いほど困難を極めていた。
この辺りの土地に関しては少女が詳しかったため何とかなった。それに字も本当に何故か分からないがすんなりと読めていた、かつ字の特徴も何処と無く日本語と似ていたため苦労することもなかった。
これぞ異世界転移物お約束の『なぜか通じる異世界言語』って奴だろう、それが適用されていたことに関してはただただ神に感謝するしかな。もし適用されていなかった完全にこの国で野垂れ死んでいたに違いない。
なら何故こんなに難航しているのか。情報が余りにも少なすぎるからだ。
赤髪の少女の目撃証言が今の所5件ほどしか無く、何処に行ったのかも検討がつかないのだ。
しかもこれに関してはフラグが立っている気配も無く、状況がかなり絶望的な物（人）探しである。
それにリュウヤはこう見えても人見知りではある。そのためか初対面の相手に物事を尋ねるという時点がかなりハードルが高かった。
コミュ障と言われればコミュ障なのかもしれないがそんな下らな

いことで駄々をこねるつもりも無いので彼は我慢し、全力で捜査にあたっていた。
　お陰様で多少はコミュニケーション能力が上がった気がする。
「それにしても、ちょっと厳しいわね。」
「相手は盗人だ、ならば可能性の高いのはやはりスラム街だね。」
「スラム街か……、余り行くたくはないわね。」
　唯一の有力の情報、それは盗人は基本スラム街の外れで盗品を売りさばいているという噂だ。
　先程仕入れたばかりの情報であるが信憑性は低い、だがやけに筋の通っている話ではある。
　理由は数少ない赤髪の少女の目撃証言者による大まかな情報、それらはいずれも少女が向かっていた先はスラム街のある方向だったという事だ。
　そこから考えると行く先はもうそこしか無いだろう。
「行先がわかったんなら後は衛兵に任せるとかじゃ駄目なのか？」
「いや、多分そんな事をやっている時間は無いね。盗品を売りさばいているのであればタイムリミットは刻々と近づいている。」
「そうか……、確かに売りさばかれたら厄介だ。」
「もし売りさばかれたとわかったのなら任せても問題は無いかもしれないがあのネックレスは超強力な力を秘めている、そんな代物が悪人の手に渡りでもしたらこの周辺の国全部滅びるだろうね。」
「何それ怖っ!!」
「だからこそ今すぐにでも取り返さなくてはならないんだよ。」
　だからこそ衛兵に任せればいいのではと思う節もあるしかし、衛兵の詰所はここからはかなり離れた場所にあるらしくそんな所に行っている時間はもう残っていないみたいだ。
　情報によると盗品は基本、夕方に行われるらしい。現在日が段々傾いていて空が赤くなってきている。
　うん、確実に間に合わないね。
「そう言えば、まだお互いに自己紹介もしてなかったね。私はフローラ、宜しく！」

少女、もといフローラは笑いながら握手を求めてきた。こうやって異性とか関係なしにコミュニケーションを取ろうとしている所がコミュ力が高い事を示している様な気がする。――平凡な俺とは大違いだな。
「俺は超絶ごく普通の人間、天宮竜也！　呼ぶ時はリュウヤで構わない。ヨロシクな。」
そう言って、リュウヤは彼女の握手に応える。そこに先程から空中をフワフワと浮き続けていた精霊がリュウヤの腕の上にちょこんと乗ってくる。
「うん、見た目は確かに平凡そうだね。だけどチンピラを無傷で成敗している以上普通とは言えないよ。」
「そう言う設定だから問題なしだ！　俺＝フツーは絶対的な原理だ、オーケー？」
「すごくしょうもない原理だね。そして、ボクはカリフ。こう見えても大精霊の一角だよ、ヨロシクー。」
「シレッと自慢混ぜてくんなよ！」
と突っ込みながらも少しカリフの頭を撫でて思っている以上のモフモフ感に彼は感動していた、これならいつまでも触っていられそうだな。
精霊ことカリフは丸で自分のモフモフ感を自慢するかのように腕を組んで俺の腕の上に仁王立ちしていた。
「そう言えば今まで深く気に留めてなかったけどリュウヤって珍しい格好しているよね。それにその髪色や瞳の色のこの国では相当稀な方だけど……。」
「それにその背負っているバッグらしきものもこの国には存在しないしね。となると確実と言ってもいいぐらいに異国人だな。一体どこから来たんだ？」
再びあの難問がリュウヤの身に降り掛かってきた。そう、答えようにも答えられないのだ。いや、答えられないのではなく信じてくれないだろう。
だけどちょっと表現を変えれば……、マシになるかな。

「ここから遥かに遠い場所からだ。」
「遠い場所？　そもそも一体どうやってこの国まで？」
「転移してきた。」
「「え？」」
　二人は目を白黒させてリュウヤの姿を注視した。
　流石に異世界から来ましたイエーイとかは言えないのでちょっと表現を軽くしてみました。けど駄目だったか、転移魔法とか存在すると思ったのに……。
　だが、言ってしまったものは仕方がないな。ここからどう弁解するかが問題となる。いっその事冗談とでも言っておくか。
　そうして彼は口を開こうとした――が先を越される。
「転移ってどういう事!?」
「いや、待ってフローラ。彼の言っている事は案外本当かもしれないよ！」
「あ、あのー。」
　リュウヤが小さい声で止めに入るが残念ながら二人には聞こえなかった。カリフは腕の上で飛び跳ねて空中に浮くと考えるような姿勢になる。
「でも転移魔法ってこの世には存在しないって話だけど……。」
「いや、確かにこの星には存在しないね。だけど、最近わかった話じゃリーサル系の他の惑星４つには生命体が存在するための条件を満たしているらしいんだ。そこから異惑星人がいると仮定する。そしてこれは最近精霊界で話題になっている話なんだけど、宇宙工学において宇宙の定理や法則を成り立たせるために必要なマナがあるらしくてそれがほんの数ヶ月前に定義されたばかりなんだ。そのマナは『時』のマナと『空』のマナと名付けられたんだ。という事を踏まえるとまさかリュウヤは『時』と『空』のマナを操れる異惑星人!?」
「いや、何言ってるか全然わからないよ!!」
「えっ!?　そうなの!?」
「そんなんじゃないよ！　第一、俺だって転移した理由が分からないってのにそんな複雑なこと聞かれたって答えれる訳無いだろ!?」

だが、何だかんだ言われながらもどうやら転移したという事で信じてもらえたらしい。
ともあれこの難問に関しては一件落着、後は転移の方法をどう説明するかにかかっている。
しかし自分自身転移の理由がわかっていない以上それは無理だろう。なら勝手に解釈してもらうしか無いか――
いやともかく奴の暴走を止めなくては話が進まない！

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

「うむむ、いつの間にかに転移か……。にわかに信じがたけどその髪色や格好からして説明が付くんだよなぁ。」
取り敢えずカリフは落ち着いたもの未だに腕を組んで考察中だった。
それもそうだ、寧ろ信じて貰えただけマシだろう。
「そう言えば、この国に俺と同じ髪色の人はいないのか？　ヤケにカラフルだけど。」
「うん、私も少しだけ聞いたことがあるけどこの国おろかこの星ではその色の髪の人が生まれた例はかなり少ないの。多分、その色よりも明るい茶色で０．１％といった所かしら。因みに黒色は前例無しね。」
「そんなレアカラーなのか俺!?　これどっからどう見ても普通じゃねぇな!!」
普通でない＝凡人ではない
それは凡人教のリュウヤにとってはかなりの痛手だった。そもそも凡人を極める必要性というものが一般人からしては全く意味の分からない頭のおかしいことだが、リュウヤにとっては死活問題だという。
「ともかく、この話は今度だね。それにリュウヤにもリュウヤなりに事情があるのだろうし、詮索はしないいさ。後、いきなり暴走して悪かったよ……。」

「ああ、所でそろそろ言ったほうがいいんじゃないか？　そのスラム街って所に。」
「そうね早く行きましょ！」
こうしてリュウヤ達の休憩タイムは終わり、ネックレス捜査へと戻るのだった。

第1章　10話　怒涛の追跡

休憩から約10分後、ネックレス探索も次なる段階へと進んだ。
スラム街、貧しい人々が多く住み犯罪が多発する地域である。そこは余りにも治安が悪いため衛兵も対処しきれていないらしい。
ここから探索が難航の兆しを見せる――かと思いきやここでリュウヤが思わぬ力を発揮する。
「不思議と周囲が優しい気がするな。一体どうなっているんだ？　俺は傍からみたら超絶健康的な人にしか見えないはずだぞ、嫌われて普通だと思うが……。」
「その言葉はその手に持っている袋をしまってから言おうか、リュウヤ。」
リュウヤが現在進行形で手に持っているものそれはアメ袋。
数少ない食料品であるが、所詮は口の中を甘くするだけの菓子だ。食糧難にあったとしてもこれだけで耐え凌ぐことは不可能だろう。
そのため彼はこのアメは要らないと判断し、すれ違う人々に遠慮なくそのアメをあげていたのだ。
「すれ違う人々に食料を分け与えるなんて何という大盤振る舞いなの……。」
「えっ？　別にこれ要らないし、食べるなら皆で食べたほうが良くないか？」
「それに身なりも原因だろうね、元は綺麗だったんだろうけど汚れているし、多少血がついていて如何にも可哀想な人って感じだもの。スラム街の人々は基本苦労してそうだから、見るに見かねてだと思うよ。」
「つまり、見過ごせないような可哀想な人が苦労している皆様方に食料を無償で分け与えていると……。俺、優男じゃん!!」
なるほど、つまり先程アメを上げた男の人に「強く生きるんだぞ」と言われたのはそういう訳だったのか。
いや、確かに薄汚い格好ではあるけれども制服って意外と高貴な服装だぞ？　それに生活に困っていた訳でもないし、清潔感溢れる生活

を送っていたと思うのだが……。何故にそこまで可哀想に見えるのだろうか。
　中にはアメのお返しに果物らしき物をくれる男の子もいた。小さくもあるが案外食欲がそそられる色だったので口にしてみた。
「何だこれ、美味いし力が少しみなぎってくる感じがするな。」
「ああ、それはきっとナスコの実ね。それは食べると体の中のマナを回復させてくれるのよ、マナが尽きた時などに食べるのが一番ね。」
「マナ――それって魔力みたいな物なのか？」
「えっ、知らないの？　まあ、基本そんな感じよ。体内のマナを消費する代わりに人は魔法を唱えることが出来る。体内マナは基本、体が自然に大気のマナを微小ながらゆっくりと吸収して回復してくれるの。」
　なるほど、この世界の魔法の仕組みはそうなっているのか。言ってしまえばマナ＝ＭＰみたいな物なのだろう。
　それにさっきカリフが言っていた『時』のマナとか何やかんやの事を考慮すればマナにはやはり属性みたいなものが存在するのだろう。そしてそれらがうまく重なり合って魔法を形成する、とまあこんな感じだな。
「俺らの星では魔法は存在しなかったんだよなぁ。」
「えっ!?　それじゃあそもそも転移魔法を唱えることすら出来ないんじゃ……。」
「だから困っているんだよ、一体どんな理由でこの国に転移してきたのか――運命なら大人しく従うけどな。」
　言い終えると静かに空を見上げた。
　別に帰りたくない訳ではない、寧ろこっちの世界の生活はとてつもなく辛そうだし今にも逃げ出したい気分だ。
　だけど、そう考える彼がいる一方でこの世界を隅々まで探検してみたいという好奇心旺盛な彼もいるのだ。
　――俺は恐らく時空、いわゆる４次元で表せるようなレベルでは無いものを超えてこの世界にやってきてしまったみたいだな。
　リュウヤはこの世界で生活してみるのも悪くないと感じていた。

今まで体験できなかったような大きな事を成し遂げられそうなそんな期待が彼の心の中を渦巻きつつあった。

だが、それ以前にまずは金だな。それが解決してから考えるとしよう。

「そっか、リュウヤも大変なんだね……。」

「大変で済まされる気がしないけど、まあそうだ。けど、なってしまった事だから何とかするしか無いさ。」

「私で良ければ、協力するよ？　こうしてネックレス探しを手伝ってもらっているんだし。」

「いや、その話はこの探索が決着してからにしよう。俺なんかの事は後回しで構わない。」

自分よりも他人を優先する精神、それはここでも遠慮なく発動されていた。

物言いたげな顔のフローラを促しながらも、スラム街探索は続いた。やることは基本今まで通りだ、住人を見つけてはあの赤髪の少女の特徴を話して心当たりが無いか聞いて回るだけだ。

リュウヤとフローラで手分けして聞き、効率化を図りつつ探索を進めていった。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

「赤髪の少女……、もしかしておまんらエリナのやつに物取られたんか？」

スラム街に入って約２０分経った所で遂にその最有力情報にぶつかった。それはリュウヤが何気なく声をかけてアメを上げた相手だった。

その相手、老爺はアメを美味しそうに舐めながらも同情するような雰囲気でそう語った。

「エリナなら恐らくスラム街の北の端の隠れ家じゃろうな、それにまだ黄昏時ではないから盗品もまだ売りさばかれていないじゃろう。」

「それで、その隠れ家に行くには？」

「ああ、それならこの道をまっすぐに行くといい。じゃが、問題はその隠れ家を見つけることが出来るかじゃな。因みにそのエリナの隠れ家を知る者はほんの一握りの盗賊や悪党だって話だ、せいぜい頑張るのじゃよ。」
盗まれた方が悪いのじゃからなと当たり前の事の様に老爺は笑った、どうやらそれがスラム街での絶対的ルールらしい。
だが、これでネックレスに在り処にぐっと近づいたのは確かである。リュウヤは老爺にお礼を言うと他の所で聞き込みしているフローラと合流する。
「そこにネックレスがあるのね、なら早く行きましょう。」
「だけどどうやってその隠れ家を探すんだ？　話しによれば相当分かりづらい所にあるらし――」
言い終える前にそいつは現れた。あの赤髪の少女が――
「どいたどいたーッ!!」
そう叫びながらその少女、エリナはリュウヤ一行に突っ込んできた。
あの時と全く同じようなシチュエーションに驚きつつも彼はそのエリナの姿にしばし見とれていた。
――やっぱり、可愛いちゃ、可愛いんだよな。やっていることが悪そのものだけど。
リュウヤはそんな彼女を通すまいと無言でその場に佇んみ、静かに彼女の事を見つめた。
だが、エリナはリュウヤを前にしてスピードを緩めるどころかその勢いで突き飛ばした。
「げはっ!!」
「おっと、ゴメンな！　悪いけど急いでいるんだ！」
「ふざけんな!!　二度目だぞゴルァ!!!」
「ちょっと、リュウヤ!?　待ってよ！」
うまく受身を取って体を華麗に回転させるとリュウヤはすぐ立ち上がりエリナを追いかけ始めた。
そのスピードはエリナとほぼ同速で彼はエリナに追いつくことは

出来なかったが、彼女を見逃すこともなかった。
「えっ!?　ちょっ、私のスピードについてくるなんて何者!?」
「朝方お前に顔を思いっきり踏まれた者だバーカ！　後もう少し当たりどころが悪ければ顔面骨折してたんだぞチキショウめ!!　しかも今回に限っては派手にぶっ飛ばしやがって絶対許さねえ！　仏の顔も三度までって言うが、俺の場合は二度までだ！　覚悟しろよ小娘！
　というかフローラのネックレス返しやがれ！」
「はっ？　えっ？　言っていること良くわかんない！　けど追いつかれる訳にはいかないからね！」
　そう言い終えるとエリナ更に加速して何処かへと行ってしまった。完全に見失った、まさかあそこまでの速さだとは思わなかったぞ。
　あれなら多分、ボ〇ト軽く越せるんじゃないか？
　取り敢えず逃したものは仕方あるまいとスピードをゆっくりと緩め、その場に立ち止まった。
　後ろを見ると、遠くからバテ気味のフローラがこちらに走ってくるのが見えた。
「ちょっと～、いきなり走って行かないでよ～。」
「ゴメンゴメン、ついカッとなっちゃって……、それに見失ったしな。」
「いや、ネックレスを奪った当人と遭遇することが出来たんだ、それだけでかなりの収穫だよ。それに多分これでチェックメイトさ。」
　いつの間にかにフローラの横にフワフワと浮いている精霊、カリフは意味ありげな笑い方をした。
　それは丸で狼が獲物を仕留めた時の笑い、そんな雰囲気を醸し出していた。

第1章　11話　忍び寄る黒き影

「チッ、本当に見つからねえな。隠れ家とやらは――」
赤髪の少女、エリナを見失ってからおよそ十分。スラム街の最奥らしき所まで来た、二人と一匹は辺りを捜索していた。
なにせ、殆どの人が知らない隠れ家だ。そう簡単に見つかるはずもないだろう。
「所で如何にも巨人が来るのを防いでいるようなあのバカ高い壁は何？」
「王都の防壁よ、高さ７０メートルほどで外からの襲撃を防いでくれるの。厚さもそれなりにあるから簡単には貫通されないでしょうね。」
淡々と喋るフローラを横目にリュウヤはその恐ろしく高い壁を見上げる。王都の防壁と言われるぐらいなのだからこの高さの壁で囲まれているのだろう、この王都は……。
完全に風貌があの有名な漫画と似ているが、流石にこの世界にはあんな残酷な化物が存在するとは思えない。
それならここまで高くする必要性はあったのだろうか、考えれば考えるほどますます謎に包まれていく。
因みにそのスラム街の最奥は予想以上に殺風景で、建物も一つも存在していないどころか幾つかの背の高い木がひっそりと生えているだけだった。
そのためか今まで気にする事もなかったあのバカ高い壁が圧倒的な存在感を放っていった。
近くに来れば来るほど、その壁は更に高く見える。これぞ遠近感の法則といった所か。
「それで、ここからどうする？　あのじっちゃんの言っていたことが本当ならばここにあるはずだが……。」
「その事なら心配無用だよ。それにフローラも大体検討ついてるんでしょ？」
「うん。でも案外薄い感じよ、やっぱりあのスピードじゃつくものも

つかないわね。」
一体どの辺りが心配無用なのか分からないリュウヤは不思議そうな表情でフローラと横に浮くカリフを見つめる。
フローラはゆっくりと目を閉じて意識を集中させた、そんな状態でも獣耳をピクピクと動かしている所がまた可愛らしい。
またその横でカリフも腕を組み、空気椅子に座ったような感じで足を組みと結構余裕そうな表情でフローラの様子を伺っていた。
「で？　どんな感じだフローラ。」
リュウヤはおっかなびっくり精神統一中の彼女に話しかける。
「多分、あの木の下かしら。そこであの少女の匂いが途切れているわ。」
「ボクも同じ意見だ。先程のスピードからして恐らく彼女は風の加護を受けている。よって走りながら残してったマナの残り香を辿れば楽勝さ。」
「何なの貴方達凄すぎませんか？　フローラはその見た目から犬族っぽいし鼻がいいのは分かるけど……。」
――カリフに至っては何だか訳のわからないこと言ってたしな！
マナの残り香ってなんだよ、そもそもマナって匂いで分かるものなのか!?
リュウヤが唖然とした表情で二人を見つめているとフローラがちょっと怒った顔で首だけこちらに振り返り、
「よく間違えられるけど、こう見えても私はれっきとした白狼族よ？
戦闘部族なのが気に入らない所だけど。」
「ええ!?　狼!?　何かホントスミマセンでした!!」
「因みにボクも狼だ。ちょっとリメイクしている部分はあるけど。」
「うん、それは知ってた。」
何処からどうみても狼であるカリフは放って置くとしてまさかフローラが本当に狼族だとは思わなかった……、強いても狼に似ている程度にしか考えていなかった。
でもよくよく見ても柴犬と狼の獣耳は見分けつかないと思う――のは俺だけか？

基本的に人間のリュウヤからしてみれば獣耳は可愛さの要素でしか無いためそこの辺りは余り気にしないのだ。それに本物に獣人を見るのは今日が初めてだし……。
「そ、それで白狼族のフローラ様、その隠れ家は何処にあるのでしょうか？」
「き、急に改まってどうしたの？　えっと、だからあの木の下辺りになにか隠されているんじゃないかなって。」
フローラは鼻をひくつかせながらその問題の木の下に歩み寄り、その場にしゃがみ込んだ。
ワンピースの下から真っ白な尻尾が見え隠れしているのが見え、ちょっと萌えてしまう。そんな場合では無いと分かっているのにも関わらずだ。
匂いだけでは不十分かも知れないが、それに＋αで大精霊カリフ様のお墨付きだ。あそこに隠れ家の入り口があるのは間違いないだろう。
「これは――」
「ああ、完全に擬態魔法だな、通りで分からない訳だ。だけどこんな甘っちょろい魔法でこの大精霊様の目を誤魔化せるとでも思ったのかな？」
フフンと胸を張りながらカリフは何やら目の前に小さな魔法陣を出現させ、その擬態魔法（と呼ばれていた物）を破った。
すると、元あった芝生は跡形もなくで代わりに何やら重々しい鉄扉が出現した。いや、鉄扉と言っても四角いマンホールの蓋に取っ手がついたようなものだ。かなり簡易的である。
それにその扉は隠すのに特化していてあの擬態魔法がかかっていなくとも恐らく近づかなければ気づかないだろう。
そこまでしてでもこの扉を隠したかった、つまり中にはかなりの盗品が隠されている可能性がある。勿論、彼女のネックレスも含めてだ。
物取りの時点で十分犯罪だが、ここまで来るともはや盗賊レベルだな、当然見過ごす訳にはいかない。

「フローラ、開けられるか試してみて。」
「任せて――うん、大丈夫。鍵はかかってないみたい。」
二人と一匹は意を決してその扉を開けて中に忍び込む、出来るのであれば事は穏便に済ませたい。
それに分かっている時点では相手は少女、変に暴力とかふるいたくはない。
しかし、それと同時に少女は犯罪者でもある。最低限度の警戒はしなければならない……。暴れられても困るしな。
うわっ何か思っていた以上にこれって難しいのな！　丸で人質を助け出す方法みたいじゃねぇか！
というか自分でも何言ってるのか分かんない！　取り敢えず、穏便に済ませる！　それでいいの！
出来るだけ音を立てないようにある程度階段を降りると目の前に広い空間が広がるのがわかった。
周りには多くの盗品と思われるものが丁寧に置いてあり、その数は千を超えていると思われる。
そしてその部屋の奥にあの赤髪の少女が――
「なっ!?　アンタら――」
「動かないで!!　今度という今度は逃さない。」
フローラが素早く踏み込んで空間の奥にいる少女、エリナに掌を向ける。刹那、部屋の気温が急速に下がり始めるのがわかった。
彼女の姿を見たエリナは少し硬直した後、声なくして後ずさる。
「ホントにしつこいな、それにまさかこんな所まで追い詰められるとは思わなかった。」
「――神妙にしていれば命までは取らない。」
絶体絶命の状況陥っているであろうエリナ悔しそうな表情で忌々しさに唇を歪めていた、それに対しフローラの声はあのチンピラと対峙した時よりもひどく冷たい。
リュウヤはそんな彼女の姿をただ見守ることしかできなかったが、急激な室内の温度の変化に思わず身震いしてしまう。
「本当に、魔法って怖いな……。」

今まで一緒に行動していた時は全く感じなかったが、今はひしひしと自らの身体に伝わってくる。
圧倒的威圧感、圧倒的存在感。更に周囲を凍りつかせるようなオーラをも放っていた。
そんな彼女に気圧されたのかエリナは既に降参するかの表情を見せていた。
――勝負あったな。完全にフローラの一人勝ちだ。
「私からの要求はただ一つよ。あのネックレスを返して、あれは常人には扱えない危険なものだから。」
空気がひび割れる音がなり、彼女の掌を中心として拳ほどの氷塊アイスボールが十数個生成されていく。一つの威力は小さいとはいえ、あれだけの数が命中すれば大きなダメージを食らうのは間違いない。
しかし、牽制にしてはやり過ぎなような気もするが盗賊にはこれぐらいがベストなのだろう。
「わ、わかった！　返せばいいんでしょ！　クソッ、せっかく金になると思ったのに……。」
為す術もなくエリナは両手を上げ、降伏を示した。やはり足が速いだけで、戦闘力はそこまで無いのだろう。
如何にも逃げることに特化している感じだ、これぞ逃げるが勝ちって事だな。意味多分違うけど。
「それに、見たところアンタ精霊使いだろ。アタシに勝ち目なんてありゃしないよ。」
「分かってたんなら初めからそんな事しなければ良かったのに……。」
「こっちにも事情ってものはあるんだよ、だけどここまで追い詰められちゃあお手上げだ。ほらよ――」
悔しそうに赤髪を掻き回したエリナは懐から出した青色の宝石が埋め込まれた金のネックレスをフローラに向かって投げた。
それをキャッチした彼女はネックレスが本物であるか確認すると静かに頷いた。
「間違いないわね。」
「これで十分だろ――それなら早いところここから出ていくんだな。

アタシもちょいとヤバそうだし。」
「分かったわ。リュウヤ、行きましょ。」
「お、おい。他の盗品はいいのかよ。」
「別に見過ごせる訳ではないけど盗まれた方が悪いという暗黙のルールの上でよ。それに私はこれ以上の争いは求めない。」
静かに抑揚のなさ気な声のフローラ、やはり仕方のない事なのだろう。
もしかしたら今回のネックレスが特別だっただけで他の物が盗まれた場合、彼女は諦めたのかもしれない。
日本の治安とはえらい違いだ。しかし、郷に入れば郷に従え、リュウヤはそれ以上文句を言うつもりはなかった。
「最後にだ。アンタ、外に出る時はくれぐれも気をつけなよ。」
「それはどういう意味？」
「そのネックレスを狙っている輩がそろそろ取引しにここに来る予定だ。会ったら面倒だろ。」
「気遣いありがと。」
素っ気無く言ってフローラが身を翻そうとしたその時だった。
リュウヤは身の危険を感じ、咄嗟に後ろをちらりと見る。

――部屋の入口付近から何やら黒い影が目にとまらないスピードでフローラに襲い掛かってくるのがわかった。

「危ないッ!!!」
咄嗟の判断でリュウヤはリュックサックを部屋の奥に投げ飛ばすと同時にその黒い影に向かってハイキックを放った。
刹那――彼の足と何者かの手首がぶつかり合い、互いに弾かれる。
その手首の先にはギラリと光る小さめの鎌が握られているのが分かった。
黒い影は弾かれた後も止まること無く地を蹴り、鎌が鋭い円弧を描きながら再びフローラの背中に襲いかかる。
リュウヤはその影の動くを確実に読み取った。そして鍛え上げら

れた判断能力でこの場で一番最適な行動を導く。
「――カリフ！　頼んだ！」
鎌は彼女の背中までおよそ残り３０センチ程の所まで迫っていた。しかし、次の瞬間鳴り響いたのは肉や服を裂く音ではなく快音だった。
金属がガラスを割るような響き、それがリュウヤの鼓膜を大きく震わせた。
わずかに身を振り向かせたフローラの背中に肉眼でギリギリ見えるような淡い薄水色の壁。
それは間違いなくフローラと初めてあった時にあの精霊がチンピラのナイフを弾く際に展開した壁と全く同じだった。
そして今、その壁があの鋭く光った鎌を受け止めている。
「カリフ――」
「間一髪……、だったね。不意打ちなんてボクは感心しないな。」
襲撃者は直ぐ様、バックステップをし体勢を整えていた。
薄暗い中であったがリュウヤは襲撃者の姿をはっきりと確認した。
身長はリュウヤとほぼ同じぐらいの女性だ、年齢は２０代半ばぐらい、顔立ちは中々美しく綺麗な紫色の瞳を持っていた。頭髪も紫色でそれは彼女の妖艶さをより際立たさせている。服は何故か女忍者、即ちくノ一らしき黒を貴重とした服装で網タイツを履いていたりなど、完全に時代劇のそれだ。
だが、普通の忍者とは違って口元を隠していない。それと若干露出度が多い。
多分こんな事をしていなければとても綺麗で妖艶な大人のお姉さんだ。しかし、鎌を持って今正に対峙している彼女は禍々しい狂気を放っている殺人鬼その物。
「ふふっ、思ったより反射神経がいいこと。これは殺し甲斐がありそうねぇ。」
その黒き殺人鬼は鎌を静かに構えながら恍惚な表情を浮かべていた。

第1章　12話　攻防戦の幕開け

「フローラ！　大丈夫か!?」
「え、ええ！　ありがとうね。」
「ジャストタイミングだ、リュウヤ！　君の反射神経には心底驚かせられたよ。」
　まんまと奇襲を防がれてしまった襲撃者は瞳に怪しげな光を宿らせながらこちらの様子を伺っていた。
　殺気こそ感じられないが、そいつは明らかに邪悪なオーラを纏っているのが見て取れる。
　エリナは派手に舌打ちする前に踏み出して怒声を張り上げた。
「一体どーいうつもりだ、アリーナ！　アンタの仕事はネックレスを買い取る、それだけだったはずじゃねーか!!」
　アリーナと呼ばれたその女はエリナを一瞥すると、あの鋭い鎌を構え直す。
「確かにそうよ、でも持ち主を連れてこいとは一言も言ってないわ。それに挙句の果てには取り返されちゃってるじゃないの。」
「ま、まさかアンタこの場にいる人全員を血祭りにあげようとしているんじゃねーだろうな！」
　声を張り上げているのとは裏腹にエリナの顔は徐々に青ざめていった。相手は余程の危険人物なのだろう、そうでなければそんな顔をするはずがない。
　そんな彼女の恐怖に満ちた顔を見てアリーナは愛おしそうに微笑む。
「勿論よ、一人部外者がいるみたいだけどこの場にいる関係者は皆殺し、そして最後にネックレスを回収する。どちらにせよ、貴方達は始末する予定だったから少し前倒ししたっていいわよね？。」
　フローラとエレナを交互に見ながら酷薄かつ冷酷に告げた。
「貴方達は私達、イゼラエス団にとって邪魔な存在なの。今すぐにでも消えてもらうわ。」
「イゼラエス団って――」

「うん、フローラの考えてる事で間違いない。あのアリーナって奴は残酷で最悪な殺人鬼グループの一員だ。」
「あら、知っていたのね。とても光栄だわ。せめて楽に殺してあげる。」
　イゼラエスというワードを聞いた瞬間、フローラとカリフの表情が険しいものへと変化した。
　エリナの表情も苦痛なものへと歪んでいった、それは丸で絶対なる恐怖怯えているようにも見えた。
　だが、この場で一人、未だに冷静さを保つ人物が居た。
「なあ、エリナ。コイツがフローラのネックレス強奪を依頼した犯人か？」
「あ？　ま、まあそうだが……。」
「それでイゼラエス団ってのは推測するに世界をも脅かす殺人鬼グループなんだな。」
「……、そう。奴らは目的の為には手段を選ばない。ゴメンな、迷惑かけちまったみたいでさ。だけど――」
「どうせ逆らえなかったとか金物欲しさみたいな理由だろ。安心しろ、攻めるつもりは全くない。それに俺もこの件に関しては無関係じゃないからな。」
　リュウヤはアリーナを睨みつけると羽織っているブレザーを脱ぎ、ネクタイを外して部屋の隅、即ちリュックサックのある場所に投げた。
　そして壁に偶々立て掛けてあった両手剣を二本ほど頂戴する。
　平凡たるもの、如何なる時も感情をコントロールす。今は超絶冷静さを保たせております！
「フローラ、カリフ。やるぞ。」
「えっ、うん。」
「ああ、鼻からそのつもりだよ。」
　再び、周囲の気温が急激に下がっていくのが感じ取れた。だが、こんな緊迫した場面で身震いするつもりはない。するとしてもそれは武者震いだ。

そして無性に込み上げてくる感情を押さえ込みながらもトーンを下げて彼は言い放った。
「――事情は知らねえが、ふざけんじゃねーぞ。」
リュウヤの言葉に反応してアリーナは殺意に溢れた様な瞳をこちらに向けてくる。だが、顔には少しばかり驚きの感情も含まれている様な気もした。
それはフローラ、カリフやエリナも例外ではない。
人生で一度しかキレた覚えがない彼だが、これで異世界転移初日から二回キレたこととなる。
「人の恐怖を駆り立てて遊んでんじゃねえよ。ドSだが何だか知らねえけど、人をいじめて喜ぶとか頭おかしいんじゃねえか？　大体、予定狂ったからって人殺して解決しようとか発想が完全にガキそのものだな。俺は命を大切にしないやつは嫌いだ。」
「へぇ？　加護も無いくせして随分と強気なのねぇ。そう言うのも私、好みよ。」
「あらそうですか程度の感想しか思い浮かばねぇな。大体、その殺意からして気持ち悪いんだよ。全くテンション抑えるだけでも体力全部使いそうだぜ。あーもう自分でも何言ってるのかわかんなくなってきたぁ!!　少なくともこれだけは覚えておけ。こいつらは誰一人として俺が殺させないからな――!!」
腰を低くして二本の両手剣をゆっくりと構えた、途中からほぼ怒り任せに喋ってしまったが冷静さだけは失わないようにと気をつける。
「本当に威勢がいいのねぇ。でも、私も一人でその精霊使いに勝てるとは思っていないわ。」
「お嬢さん、それはどういう意味だい？」
カリフが空気をひび割らせながら物理的にも張り詰めた雰囲気を演出しながらアリーナを睨みつける。
そんな大精霊を見てアリーナは小さく吐息し――
「グリセルド、出番よ!!」
「アイアイサーッ!!」
怒号とも変わらるや太い声が部屋に響き渡った、次の瞬間――

部屋の天井がバリバリとひび割れ、一人の男が上から飛び降りてきた。
その男はガンッと重そうな斧を床に叩きつけ、不敵に笑う。床は天井と同じように割れ、そのひびはリュウヤの足元まで迫ってきていた。
天井の一部が崩れ落ち、暗くなりかけている空が見える。その御蔭で部屋の中は更に明るくなり、辺りの様子を確実に捉える事が出来るようになった。
「……、わざわざ天井割って入ってくる必要性無いわよね。」
「その方が楽なだけだ姉さんよぉ！」
その男、グリセルドは身長が低く、１６０センチ前後だった。しかし、かなりの巨漢で茶色と黒を貴重とした盗賊らしき装束を着ている。頭には所々凹凸がある金色の兜を被っていて、髪は生えていない様だ。目は三白眼の鋭い目で、瞳は茶色。
見てくれから彼の凶悪さが滲み出ている。武器も１５０センチほどあるデカい斧で力もかなり強そうだ。
「仲間がいたか……。フローラとカリフはあのサディスティック女を頼んだ！　俺はエリナを守るようにうまく立ち回りながらあのオッサンを倒す。」
「ほ、本当に大丈夫なの!?　そんな役、リュウヤにはキツ過ぎるよ！」
「問題ないさフローラ、二刀竜と恐れられた天宮竜也様を舐めてもらっては困るぜ。」
「剣を両手持ち――俺初めてみやしたぜ姉さん。」
「ふふっ、あの子面白いわね……、何の魔力や加護も感じられないと言うのに何処か強そうな力を秘めているみたいで――。何だかゾクゾクしてきちゃったわ。」
後ろにいるであろうエリナをチラッと確認すると、彼女は部屋の端で怯えてながらも静かにこちらの様子を見ていた。
エリナに戦闘能力はほぼ無いだろう。そう考えると形勢は三対二で、数的にはこちらが少し有利だ。
だが、リュウヤは確かに感じ取っていたあの二人の強さの異常さを

……。

――だけど、こんな所で死ぬわけにもいかない。それにあの惨劇を……、もう目にしたくはない。

だから容赦しない、たとえ力が無かろうと俺は全力で戦い抜く――

「行くぞ――フローラ、カリフ！」

「ええッ！」

「お嬢さん、申し訳ないけどこの場で逝ってもらうよ。」

掛け声をあげると共にリュウヤは床を力任せに蹴った。

そして、彼の目には見えていなかったが後ろからとてつもない数の氷刃と水球がアリーナに向けて砲撃されていた。